

初のヨーロッパ遠征代表帰る

お土産は13勝10敗2引分け

三月一日から西ドイツ各地で開かれた第四回七人制室内世界選手権大会に出場した日本代表チームは、二月十七日出発以来フランス、ドイツ、イスラエル、チェコと選手権大会前後にヨーロッパ各地を転戦、初遠征ながら、25戦13勝10敗2引分けの成績を残し、四月十日、53日ぶりに帰国した。

世界選手権出場 1961

巻頭言

遠征から帰って

監督 高嶋 冽

こんどの遠征は強行スケジュールにもかかわらず全選手はよくやってくれた。初めての遠征で世界のハンドボール、とくにヨーロッパのハンドボールを見聞し、得るところが非常に多かった。その意味で大成功と思っている。世界選手権大会でチェコ、ルーマニアに敗れて入賞こそできなかったが、日本の実力はかなり上位にある。フランス、ドイツ、デンマークなどの国際試合からみて、まず日本の実力は7位から8位というところである。悪くみても10位だとみていい。チェコ、ルーマニアに敗れたが、その原因は日本のデフェンスの甘さと、相手があまりにも強かったということである。日本はこんどの遠征でいったいなにを学びとったか。まず第一にわれわれ日本チームの欠点を発見したことである。それはデフェンスの甘さ、フォーメーションとアタックの研究が絶対必要だということである。第二は日本の攻撃力はすばらしいということである。自画自賛になるが絶対ヒケをとらないという自信をつけたことである。これからは日本人独特の個人技術に、ヨーロッパの戦術を加え、さらに体力をつければ世界制覇は決して夢でない。ドイツでケンパ氏にあってこまかい点を指摘され心強かった。これが大いに役立ったのはよかった。フランスはステート・アマチュアに踏み切り、国を挙げてナショナル・チームに力を注いでいた。スポーツ専門のチーム、ひとくちでいえば軍隊チーム（ナショナル・チーム）である。

しかしこのナショナル・チームは強いが、底辺にあるローカル・チームはそれほどでなかった。こんどの世界選手権で特に気がついたことはいままで個人技にたよっていたスウェーデンが、チェコ、ルーマニアの総合力とスピードに負けた。そしてルーマニアが優勝した。フィールド、インドアに限らずハンドボールは総合力とスピード、この二つは絶対欠かせないことをあらためて認識した。日本のハンドボールが大きく前進するには、これから優秀な素材を発見し、これを鍛えあげることである。ヨーロッパ遠征で学んだすべての長所を、これからひとつづつ全国各地にひろめてハンドボールの発展の資料としたい。



代表チームをねぎらう

的場益雄

五十日にわたる欧州遠征の旅の疲れも見せず全員揃って元気に帰った。私は選手団が、悔のないゲームをやりぬいた自信に溢れた姿で帰国したことを皆様に報告できる。それと共に私は、この一大試練の労苦を見事貫いた選手団に対し、心からの感謝と敬意を表したい。フランスで初めて勝星をあげたことが報ぜられた時、ある人は言った。「フランスで勝ってもあれはローカルチームだ。世界選手権の檜舞台ではどうですかね—」と。私はこの言葉をよい意味にとりたい。

私は今回の選手団が世界選手権に出場し、引続きドイツ、チェコ、フランス、イスラエルと転戦し、五十日間に二十五の国際試合を行ってきただけでも大変な事であったと考えている。しかも、十三勝十敗二引分の輝しい成績をおさめた体力、知力と精神力は驚歎すべきであり、特筆すべき大成果であると信じている。

ゲームの成果と共に私はこの遠征によって選手と役員がどれだけ技術を高め、知識を広めてきたかを是非識りたかった。日本にいて毎日の新聞の記事を食い入るように眺めていた者の切なる願いである。その意味でも関東学生選抜チームと帰国歓迎試合を行ったことは意義がある。

直感したことを挙げてみよう。

第一、感じたことは動きに鋭さが増したこと。第二、チャンスは絶対逃さず、機をみてラッシュ的攻撃に移れること。第三、ゴール前のいわゆるローリング的遅攻戦法が少なくなり、正面から直進的攻撃が多くなったこと。第四、サイドからとび出して攻撃する新しいオフェンスが見られたこと。第五、デフェンスの考え方が根本的に変ったのではないかと思われたこと。第六、マーク的サイドへのデイフェンスより、前後に進退のできるデイフェンスが多くなったこと。第七、キーパーの勘が特によくなり、前で止めるようになったこと。第八、パスコースとダッシュが実に正確になったこと。第九、スナップ的シュートが多くなったこと。第十、転んでもシュートだけは正確に打っていること。

個人個人の技術の向上も十分伺われたが、チームのまとまり、監督、コーチの作戦、ゲームの運び方の一端も伺うことができた。『強くなるためには、外国選手を招待するより、外国へ遠征することだ。』最後に私は、この壮挙が実現できた蔭に、全国万を越えるファンの方々と声なき声は勿論のこと、日本体育協会、関係官庁はじめ報道関係並びに大学、実業界等の心よりの支援を感謝したい。

（日本協会常務理事）

特集

第四回世界室内選手権大会記

日本、決勝リーグ進出ならず

第四回七人制室内ハンドボール世界選手権大会は3月1日から12日まで西独の各都市で開かれた。1日から3日まではは12チームによる第2次リーグ戦があり、日本は1日夜カールスルーエでチェコと対戦し38—10で敗れた。翌2日はハスロッホで昨年来日したルーマニアと対戦し、29—11で再び敗れ決勝リーグ進出へのチャンスを逸した。3日間の第2次リーグ戦でA組からスウェーデン、ノルウェー。B組からドイツ、フランス。C組からチェコ、ルーマニア。D組からデンマーク、アイスランドが決勝リーグに進んだ。決勝リーグはA組の1位がチェコ。B組の1位がルーマニアとなり、優勝決定戦は12日ドルトムントで行なわれ、延長戦のすえルーマニアが9—8でチェコを破り優勝した。

第一戦チェコに完敗

▽C組第一戦（3月1日）

チェコ 38（15—5 / 23—5）10 日本

（レフェリー）アローウス（スウェーデン）

（観衆）四千人

（評）午後7時30分開始、チェコはさすが優勝候補だけあって強い。日本の完敗に終った。前半17分ごろまでが精いっぱい。選手はあがり気味で動きが鈍い。14分まで6—4、17分まで8—5とかなり善戦した。試合はここまで、あとはチェコの速攻に手が出なかった。結局は力の差であった。日本のデフェンスはチェコFWの動きについていけずノーマークが多かった。オフェンスではゴールエリアに近づきすぎ、平行パスが多いためカットされてチャンスをつぶされた。結論としては体力とスピードとの差である。ボデーコントロール、シュートのタイミングはそれほど差がなかった。チェコはタイムアップまで全力疾走し、これがチェコの勝因といっていい。

（高嶋監督記）

〔チェコ〕	S	得	反
ピヒア	0	0	0
ルーシャ	3	2	1
マレシュ	9	6	0
ハブリク	9	5	1
ラダ	9	7	5
ヘルマン	6	5	4
ルコジク	4	2	0
トロヤーン	13	9	2
ドウダ	5	2	1
プロバズニク	1	0	0
アルノシュト	0	0	0
	59	38	14

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	0
今野	0	0	0
村上	1	0	7
佐藤	8	1	3
深江	4	3	2
服部	8	0	3
高村	4	0	1
田口	2	1	4
山田	9	1	1
竹野	20	4	7
近藤	3	0	1
	59	10	29

遠征総成績

	月日	勝敗	スコア		チーム	
1.	2.19	●	日本 18（7—18 / 11—18）36		フランス軍隊	フランス
2.	22	○	日本 27（13—14 / 14—7）21		リヨン選抜	フランス
3.	25	○	日本 22（9—10 / 13—8）18		アルザス選抜	フランス
4.	26	○	日本 23（12—15 / 11—6）21		アゴンダージ	フランス
5.	3. 1	●	日本 10（5—15 / 5—23）38		チェコ	世界選手権
6.	2	●	日本 11（7—14 / 4—15）29		ルーマニヤ	世界選手権
7.	4	△	日本 30（13—13 / 17—17）30		ハイデルベルグ	ドイツ
8.	8	○	日本 28（14—14 / 14—13）27		グンメルバッハ	ドイツ
9.	10	●	日本 23（11—13 / 12—16）29		ベストハーレン	ドイツ
10.	13	●	日本 16（8—11 / 8—14）25		ゾーリンゲン	ドイツ
11.	15	○	日本 30（20—12 / 10—10）22		ギーセン	ドイツ
12.	16	○	日本 13（10—7 / 3—5）12		フランクフルト	ドイツ
13.	16	○	日本 13（7—7 / 6—5）12		マインタウンス	ドイツ
14.	19	●	日本 20（13—20 / 7—17）37		チェコ選抜	チェコ
15.	20	△	日本 20（7—10 / 13—10）20		北ボヘミアン	チェコ
16.	22	●	日本 23（11—8 / 12—21）29		モラビア州	チェコ
17.	24	●	日本 13（8—16 / 5—18）34		東スロバキア	チェコ
18.	25	●	日本 21（8—14 / 13—11）25		西スロバキア	チェコ
19.	27	○	日本 24（12—13 / 12—9）22		ステラー	フランス
20.	29	○	日本 26（18—10 / 8—10）20		ノルマンデー	フランス
21.	30	●	日本 20（9—9 / 11—13）22		デジョン	フランス
22.	31	○	日本 33（17—9 / 16—6）15		ブルゴーニ	フランス
23.	4. 4	○	日本 16（8—9 / 8—6）15		イスラエル選抜	イスラエル
24.	7	○	日本 23（11—4 / 12—4）8		ハポエル	イスラエル
25.	8	○	日本 22（12—6 / 10—4）10		マカビ	イスラエル

25戦13勝10敗2引分

注＝イスラエルの試合は11人制。
そのほか全部7人制。



対チエコ戦　トロヤーンのシュート、右は竹野⑬

ルーマニアにも歯が立たず

▽C組第二戦（3月2日）

ルーマニア 29（15−4／14−7）11 日本

▽レフェリー ヌドセン（デンマーク）

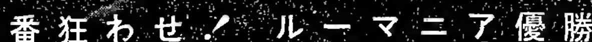
〔評〕ハスロッホ体育館は40メートル×20メートルの正式なコートだが、床面はコンクリート。この地方の人口は三千人の小都市でありながら観衆は二千人もきた。試合開始は午後8時30分。日本のベンチは西独のケンパ氏がいていろいろと指示してくれた。ルーマニアのメンバーは昨年来日したチームから、ブルガルとコスタケ（兄）が抜けただけ。ナデア、ナト、コスタケ(弟)という強力メンバー。両チームとも互いに手の中を知りつくしており興味深かった。前半10分ルーマニアは6−2と早くもリードした。日本の2点は1分、2分に竹野がシュートしたもので、これ以上はどうにもできなかった。日本は大いに善戦した。7分GK今野がフィルドに出て反則防御をしたため2分間の退場を命ぜられ、福本が交代した。この直後村上も退場し、日本は六人でゲームをしなければならない最悪の状態となった。ルーマニアにボールを渡さない戦法に出たため、ストリングとみなされてルーマニアのフリー・スローとなった。このため観衆が騒いだ。GKの退場に次ぐルーマニアのフリー・スローを命じた審判のミス・ジャッジについてである。館内は騒然となりゲームは3分間中断された。近藤主将から抗議を申し入れたが、受けつけられずそのまま試合再開。日本は佐藤、井上、竹野の健闘で前半5点をあげた。ハーフ・タイムのときケンパ氏は「日本は無駄な動きが多い。サイドを利用してもっと攻撃せよ」と注意された。後半にはいると日本は20分までわずか2点しかとれずルーマニアのペースにまき込まれた。この試合から学びとったことはサイド攻撃を研究すること、個人プレーは役に立たぬことだった。（高嶋監督記）

〔ルーマニア〕	S	得	反
レドル	0	0	0
デマン	3	2	3
イバネスク	10	7	6
コバッツ	2	1	7
ナト	8	0	1
ナデア	5	2	4
コスタケ(弟)	3	2	3
モーゼル	19	11	2
オテリア	4	3	3
ボゴレア	0	0	0
コーマン	2	1	1
	56	29	30

〔日本〕	S	得	失
福本	0	0	0
今野	0	0	1
村上	0	0	2
佐藤	11	2	3
深江	0	0	6
服部	8	2	3
田口	0	0	0
井上	3	1	1
宮原	1	0	0
山田	8	0	2
竹野	18	6	4
	49	11	22

注＝今野は反則で2分間退場

「ハンドボール」第六号目次



番狂わせ！ ルーマニア優勝

▽1—2位決定戦

（3月12日、ドルトムント、ベストファーレン体育館）

ルーマニア（B組1位）	9			8	チェコ（A組1位）
	4	—	4		
	3	—	3		
	0	—	0		
	0	—	0		
	0	—	0		
	2	—	1		

（試合経過） ルーマニアが2分に1点を先取したが、チェコも4分にタイとした。以後は慎重なキープが続いて15分を過ぎても互いに2点しかあげることができなかった。16分この試合初めてチェコが3—2とリード。ルーマニアは19分、23分と連続ゲットして再び主導権を握った。チェコは26分、7メートルスローを得てかろうじて4—4の同点として前半を終った。

○…後半も一進一退。ルーマニアはハーフタイム直後の得点を生かして27分30秒まで7—6とリードし、この〃1点差〃で勝負がついたかと思った。しかし28分チェコは7メートルスローをものにして7—7のタイ・スコアとなった。

○…延長にはいってからはさすがの両チームも疲れと緊張で動きが鈍くなり迫力を欠いた。第一延長前後半は0—0、第二延長前半1分30秒ルーマニアは7メートルスローで待望の1点をあげた。ところが、それから10数秒後にこんどはチェコが7メートルスローを決めて8—8の同点。

○…だがこの直後、わずかなスキをついたルーマニアHBコスタケ（弟）のカットインからのシュートが、チェコのGKピチヤの左脇下に鋭く決まってルーマニアが9—8とリードしそのままチェコの追撃をふり切って優勝した。

（評） まさに世紀の一戦。予選リーグでチェコは12—8とルーマニアを破っており、チェコの優勢とみるのが常識だった。ゲームは大接戦、しかも第2延長という文字通り手に汗をにぎる激戦となった。一万八千の観衆のどよめきのなかに、両チームの選手はベストをつくして戦かった。チェコの個人技術はまさに神技、体さばき、パス、キャッチ、GKの果敢な体当たりは日本選手をうならせた。ルーマニアはロングを連発、デフェンスはチェコの細かい技術と小さなクロスプレーを押えた。チェコはルーマニアのデフェンスに手こずり、速攻のチャンスを待っていた。ルーマニアの後半の追撃にチェコはあせり出して凡ミスをくり返し、これが命取りとなって延長となった。ルーマニアはイバネスク（ロングシューター）、ビタ（チャンスメーカー）、モーザ（ロングシューター）の活躍が光り、これがルーマニアの勝因となった。

（松本コーチ記）

（写真は決勝戦ルーマニア対チェコ戦から超満員の観衆をごらん下さい。）

チェコ、ユーゴ（女子）など強豪来日か

世界選手権が開かれているときに、日本選手団の式場団長、高嶋監督は各国の関係者と会談した。とくにチェコ、ユーゴ、ルーマニアの三国との間では日本との試合を希望している。

1 ルーマニアは来年の夏か秋に日本を招待したい。（中国、ソ連経由で）

2 明年の冬から明後年の春にかけてユーゴの女子チーム（七人制）が日本を訪れたい。

3 チェコは日本訪問を希望、早ければことし中に実現しそうだ。

スウェーデン 3連勝ならず

チェコは油断が災いか

【後記】大会前の予想では第二回、第三回大会に優勝しているスウェーデンが三連勝をするのではないかといわれていた。予想通りスウェーデンはノルウェー、ユーゴを破って決勝リーグに進出したが、二試合とも必ずしも楽勝とはいえなかった。とくにユーゴとは前後半とも1点差という接戦をつづけた。決勝リーグ直前の下馬評は、前大会二位のチェコの方がスウェーデンより優勢であるという予想に変ってきた。

そのチェコはルーマニアを12－8で降して、その好調を決勝リーグに持ち込んでいたので当然だった。決勝リーグの第一戦でチェコがアイスランドと15－15で引き分けたときは再びスウェーデン優勝かと騒がれたほどだった。これはチェコのまずい試合というより、アイスランドの善戦が光った。この両者は第三回大会の第一次リーグで顔を合わせ、27－17とほとんど一方的にチェコが勝っている。

チェコ対スウェーデンの試合は第二次リーグの最終日、ベルリンで行なわれた。前半チェコが当たりに当たり10－5とリード、結局15－10で破って優勝戦に進んだ。

チェコは前大会の決勝でスウェーデンに12－22で敗れている。昨年そのスウェーデンと国際試合をして雪じょくをとげ、そのときに得た経験と自信が今大会で大きくものをいったと見るべきだろう。

チェコに敗れたスウェーデンは惜しくも三連勝を逸したが、ドイツ（東西合同）を降して三位となった。

さてチェコの対抗馬はルーマニアかドイツかといわれた。チェコにしてはドイツよりもルーマニアの方が内心歓迎する相手だったろ

世界選手権総合成績

優勝	ルーマニア
2位	チェコ
3位	スウェーデン
4位	ドイツ
5位	デンマーク
6位	アイスランド
7位	ノルウェー
8位	フランス

世界選手権大会総記録

▽第2次リーグ

（A組）

スウェーデン 15（11－5、4－6）11 ノルウェー

ノルウェー 18（9－9、9－8）17 ユーゴ

スウェーデン 14（9－8、5－4）12 ユーゴ

（順位）

1 スウェーデン 2勝

2 ノルウェー 1勝1敗

3 ユーゴ 0勝2敗

（B組）

ドイツ 33（11－3、22－4）7 オランダ

フランス 21（7－5、14－6）11 オランダ

ドイツ 21（9－2、12－5）7 フランス

（順位）

1 ドイツ 2勝

2 フランス 1勝1敗

3 オランダ 0勝2敗

（C組）

チェコ 38（15－5、23－5）10 日本

ルーマニア 29（14－7、15－4）11 日本

チェコ 12（3－3、9－5）8 ルーマニア

（順位）

1 チェコ 2勝

2 ルーマニア 1勝1敗

3 日本 0勝2敗

（D組）

デンマーク 24（9－6、15－7）13 アイスランド

アイスランド 14（7－7、7－5）12 スイス

デンマーク 18（12－5、6－8）13 スイス

（順位）

1 デンマーク 2勝

2 アイスランド 1勝1敗

3 スイス 0勝2敗

▽決勝リーグ

（A組）

スウェーデン 14（9－8、5－4）12 フランス

チェコ 15（10－7、5－8）15 アイスランド

＝引き分け＝

スウェーデン 18（7－3、11－7）10 アイスランド

チェコ 25（11－3、14－3）6 フランス

アイスランド 20（11－3、9－10）13 フランス

チェコ 15（10－5、5－5）10 スウェーデン

（順位）

1 チェコ 2勝1引き分け

2 スウェーデン 2勝1敗

3 アイスランド 1勝1敗1引き分け

4 フランス 0勝3敗

（B組）

ルーマニア 15（7－6、8－7）13 デンマーク

ドイツ 15（10－4、5－4）8 ノルウェー

デンマーク 10（6－7、4－2）9 ノルウェー

ルーマニア 12（7－5、5－4）9 ドイツ

ルーマニア 16（9－6、7－8）14 ノルウェー

ドイツ 15（6－4、9－9）13 デンマーク

（順位）

1 ルーマニア 3勝

2 ドイツ 2勝1敗

3 デンマーク 1勝2敗

4 ノルウェー 0勝3敗

▽順位決定戦

▽5－6位決定戦（3月11日、エッセン）

デンマーク（B組3位）14（7－8、7－5）13 アイスランド（A組3位）

▽3－4位決定戦（3月11日、エッセン）

スウェーデン（A組2位）16（8－9、8－5）14 ドイツ（B組2位）

▽7－8位決定戦（3月12日、ドルトムント、ベストファーレン体育館）

ノルウェー（B組4位）13（7－7、3－3：2－0、1－2）12 フランス（A組4位）

う。チェコが悲願の決勝進出を遂げながら優勝できなかった一つにはこの油断がある。その理由はあとで述べよう。

ルーマニアとドイツのグループはデンマーク、ノルウェーの健闘もあったが、結局12―9でドイツを破ったルーマニアが1―2位決定戦に進出した。ハンドボール王国といわれるドイツがフィールドで圧倒的な強味を見せながら、室内ではそれほどの強さをみせなかったのは不思議だ。UPI通信などは大会前から「フィールドとインドアでは、別のタクティス（戦法）を必要とするので事情が違う」とドイツをあまり買っていなかったし、日本代表団の深江選手もデイリースポーツ紙に寄せた通信にも「東西両ドイツが選手を同数ずつ出し合って編成したチームだけに十分実力を発揮できなかった」と伝えている。

ともあれ決勝はチェコ対ルーマニアとなり予想はチェコに有利だった。

その理由はチェコは前大会の2位、しかも今回はスウェーデンを破って好調である。そのうえルーマニアとは第1次リーグの第3日で顔を合わせて、12―8とすでに1勝をあげている。前大会での両者はチェコ21―13ルーマニアとチェコが勝ち、昨年十二月の国際試合でも21―12でチェコが勝っているなどがそれである。

チェコの敗因はルーマニアには勝てるという過信にあった。結果はルーマニアが優勝した。

これは相手に対する旺盛な研究心とすぐれたチームワークがもたらしたものである。とくに第2次リーグでチェコに敗れた経験を生かしたことも、前大会3位のドイツと同4位のデンマークを決勝リーグで破ったのが勝因のひとつに数えられる。

大会をふり返ってみて正直なところ、ルーマニアの優勝は番狂わせといえないことはない。それは前大会では第一次リーグで全敗したこと。優勝候補はスウェーデン、チェコ、ドイツであったからだ。前回の4位のデンマークは期待されながら精彩を欠き、逆にアイスランドの健闘（6位）が光った。ドイツ、フランスも思ったよりふるわなかった。（杉山　茂）

日本独自のプレー発揮できず

ルーマニア　斗志と研究心の勝利

深江幸次郎
―代表団副主将―

印象と反省

世界選手権は二十二カ国が予選を行ない、それを勝抜いた十二カ国（日本は特別参加、ノルウェーは特別参加のブラジルに代って出場）が四つのグループに分かれて3月1日から12日までドイツ各地で行なわれた。その結果一位ルーマニア以下チェコ、スェーデン、ドイツ、デンマーク、アイスランド、ノルウェー、フランスの順となった。

この大会は開会式がなかった。参加十二カ国が一堂に会し得なかったことは世界選手権として少し気分の盛り上がりを欠いたようで寂しかった。

初参加の日本の勝敗は予想通りの成績だった。想像以上の大観衆を前に自らのプレーを見失いふん囲気にのまれたこともまた確かだった。

しかし日本選手団には大きなミスがあったことは卒直に認めなくてはなるまい。

それは日本独自のプレーを発揮できなかったことだ。当初「相手が未知数だからフランスを転戦しながら作戦を立てる」という方法をとった。実際はそのトライアルゲームでむしろ勝つことばかりを考え、大会を前にすでに戦力を消耗してしまった。このことは日本らしいプレーを発揮するという点では大きくマイナスした。

ルーマニアの初優勝は大会の一大センセーションだった。

十一人制ハンドボールの方は世界の強豪として認められていたが、まさか優勝しようとはだれも予想しなかった。

第2次リーグでチェコに6点差で敗れ、日本にも、前半食い下がられたのだからそれも当然だろう。

ところがスェーデン、チェコとともに優勝候補にあげられていたデンマークを破ってから波にのった。終始遅攻戦法をとってドイツを破り一気にチェコも倒してしまったのである。

ほとんどが十一人制の選手でブルガル、ナト、ナデア、コスタケ兄弟、コバッシュ、レドルなど来日選手が主体となっていた。その試合運びにはまだまだ研究の余地も感じられたが、体力にものをいわせしかも慎重すぎるくらい慎重に攻めた。優勝戦（対チェコ）では劣勢をその慎重さと闘志で補ない完全にチェコを自己のペースにのせてしまった。

七人制をもっともよくマスターしていると思われたスェーデン、チェコ、デンマーク（スェーデンは直接ルーマニアとは対戦しなかったが）が、新興ルーマニアに敗れ去った原因にはルーマニアの幸運をあげる前に強固なスタミナと研究心をあげねばなるまい。

次に強い印象を受けたのはドイツだ。東西に分かれる悲運を背負い、統合ドイツチームとして参加した。試合ぶりにも個々のプレーにも現われ、お互いが敬遠しながらのプレーなど胸のつまるものさえあった。東西が完全にひとつになればやはり第一のチームと思えた。

優勝を逸したとはいえチェコ、スェーデンの試合ぶりをみごとだった。

もし若さ、体力にルーマニアを上回っていれば勝敗はところを変えていただろう。

正確なパスにはスピードとフェイントが加味され、からだをコートにぶつけるようにして放つシュート、臨機応変のメンバー・チェンジ。いずれも室内ハンドボールの見本のような完成されたものだった。

日本と簡単に比較するなら経験の差は別として握力の差、体格の差、スナップの差、ボールに対する執着心の差などがあげられよう。

（この原稿は、代表団副主将、深江幸次郎選手が勤務先のデイリースポーツ社に寄せた「遠征だより」＝デイリースポーツ3月31日付掲載＝を同社の御好意で転載したものです）

ヨーロッパ各地遠征試合記録

——世界室内選手権大会に出場した日本チームは、本大会の前後にフランス、ドイツ、チェコ、イスラエルなど各地を転戦し、国際親善試合を行なった。本場のハンドボール界に初めて登場した日本チームは各地で大いに歓迎され、立派に親善の役目を果した。と同時に技術的にも学ぶところが多く有意義な遠征だった。——

フランス

◇第一戦（2月19日）

全日本チーム対フランス軍隊選抜チームの試合は2月19日午後3時55分からパリのクーベルタン・スタジアムで行なわれた。日本は36－18で敗れ、海外遠征の第一戦を飾れなかった。

フランス陸軍 36（18－11、18－7）18 日本

〔日本〕		S	得	反
GK	今野	0	0	0
GK	福本	0	0	0
	村上	0	0	3
	服部	4	3	3
	深江	3	1	0
	山田	5	4	0
	竹野	14	3	2
	近藤	3	0	1
	井上	2	1	0
	高村	1	0	1
	佐藤	7	6	1
		39	18	11

	〔フランス〕	S	得	反
△GK	フェリグナク	0	0	（不明）
△GK	ペルジョ	0	0	
△	オワナン	6	4	
△	フェブル	2	2	
	エシュペルリ	7	5	
△	エカルマン	3	2	
△	シルベストロ	7	5	
△	パオリーニ	8	8	
△	トーマス	5	3	
△	コテロウ	6	4	
△	ランベール	1	1	
	ビルフロワ	4	2	
		49	36	

（△印＝世界選手権出場選手）

（評）コートは縦38メートル、横18メートル。日本チームは最初の試合で大いに張り切っていたが、会場到着が遅れ試合前の練習も十分できなかった。さらにフランス式の開会式となって全選手がコチコチになってしまった。前半フランスの速攻にシテやられ、あっという間に10点とられてしまった。そのうち観衆の大歓声でベンチの声は少しも通らず、遠征のむずかしさを初めて味わった。後半にはいってやっと落ち着きを取りもどし対等に試合を進めた。このフランスチームはフランス国内のチームでも常に10点差で勝っているという。日本チームにとってはいい勉強になった。負け惜しみではないが、点差の割にはそう強いとは思わなかった、尾藤、境井両名がカゼにやられ式場ドクター大奮闘（高嶋監督記）

19年ぶりの勝利

◇第二戦（2月22日）

全日本チーム対リヨン選抜チームの試合は2月22日夜、リヨン市のビリューブバンヌ体育館で行なわれ日本は27－21で快勝した。前半1点をリードされたが後半竹野山田の活躍で逆転に成功した。日本チームが外国チームに勝ったのは昭和17年11月29日（神宮）に当時の訪日ドイツ艦隊を8－7で破っていらい実に19年ぶり。戦後は西独（31年）に8連敗、ルーマニヤ（35年）に10連敗している。海外遠征でも初めての勝利。

日本 27（14－7、13－14）21 リヨン選抜

〔日本〕		S	得	反
GK	福本	0	0	0
GK	今野	0	0	0
	尾藤	0	0	5
	村上	1	0	0
	深江	3	0	0
	服部	9	2	5
	田口	1	0	5
	佐藤	7	4	8
	高村	0	0	0
	井上	0	0	0
	宮原	0	0	0
	山田	9	4	2
	竹野	26	17	6
	近藤	0	0	0
		56	27	31

〔リヨン〕		S	得	反
GK	ドンデル	0	0	1
GK	パリッ	0	0	1
	グランジャン	3	3	5
	カラロ	10	4	7
	ムニエル	5	1	2
	ジニエル	3	0	1
	シェルバン	4	1	3
	マリー	2	0	1
	トウデ	2	1	1
	アウゼル	7	4	4
	ピグヌ	11	5	5
	ルパルク	3	1	0
	モアジ	2	1	1
		52	21	32

（評）観衆は二千五百人、〃満員御礼〃。日本の応援団は式場団長、荒川研究員、境井通訳、大使館員二人の計五人。わたしと中沢マネージャー、松本コーチ、パリ駐在の河内理事はベンチにはいった。日本は最初から正攻法をとった。第一戦は負けたが、国際試合に対する自信を深めたのは大きなプラ

HANDBALL

ETCHEVERRY, LE FRANC-TIREUR

Ce soir, à Villeurbanne

LYONNAIS – JAPON

Saint-Maur éliminé de la Coupe Sabatier

PETITES NOUVELLES

フランスのスポーツ新聞「レキップ」の切抜き

日本チームの第一戦です。2月19日パリのクーベルタン・スタジアムで行なわれたフランス軍隊チームとの試合。フランスのポイントゲッターであるエシュペルリ選手の豪快なシュート。これをみているのは竹野君、背番号14は近藤君。左上の方に高村君（背番号7）、その左は村上君。日本のバックスが完全に抜かれたところ。写真のすぐ右下は次の試合、日本対リヨンのことが書いてある。

ス。これがこの試合に直接ひびいてよく動けた。パスを低く早く、しかもバウンドパスを多用させた。ロングとカットインを織りまぜ、しかも竹野以外は全部下からシュートし、これがみごと図に当たった。前半14—13と1点をリードされたが、後半この失点をはね返した。そして遠征試合初の勝利を握った。(高嶋監督記)

◇第三戦（2月25日）

全日本チーム対アルザス・オールスター・チームの試合は2月25日夜、ミュールーズ(フランス)で行なわれ、日本は22—18で勝った。

日本 22（13—8、9—10）18 アルザス・オールスター

〔日本〕		S	得	反
GK	今野	0	0	0
	尾藤	0	0	2
	村上	0	0	9
	佐藤	4	2	1
	深江	1	0	3
	服部	11	6	2
	高村	0	0	1
	田口	1	0	3
	山田	15	7	6
	竹野	27	7	7
		59	22	34

〔アルザス〕		S	得	反
GK	ウェインストエルフェル	0	0	0
GK	アルムブリュステル	0	0	0
	パリス	9	2	1
	サングラン	12	4	3
	オードウィン	1	0	2
	シルトン	5	0	1
	ハレル	2	0	0
	ハラス	9	5	0
	フリーマン	3	1	0
	フェラー	8	4	1
	ハック	8	2	0
		57	18	8

(評) アルザス・オールスター・チーム(別名全ミュールーズ)は1960年フランスのチャンピオン・チームである。ミュールーズはハンドボール発祥の地でもあり、それだけに意義深い試合だった。日本は堂々と正攻法でのぞみ、アルザスに4点差をつけて破った。この試合にはバウマンIHF会長ら国際連盟の役員が観戦した。竹野、山田の二人にボールを集めて打たせたのがよかった。日本はフランスの実力を知り得たことは大きなプラス。(高嶋監督記)

◇第四戦（2月26日）

全日本チーム対オール・ロレーヌ(フランス)の試合は2月26日夜アゴンダージ市で行なわれ、23—21でロレーヌを破った。これで日本はフランスでの成績は4戦3勝1敗。

日本 23（11—6、12—15）21 ロレーヌ

〔日本〕		S	得	反
GK	福本	0	0	0
GK	今野	0	0	0
	尾藤	0	0	1
	村上	2	1	5
	田口	0	0	6
	深江	5	1	6
	服部	13	2	9
	高村	1	0	4
	井上	2	1	2
	宮原	2	0	7
	山田	13	6	2
	竹野	25	12	15
	近藤	0	0	5
		63	23	62

(注) 佐藤は欠場

〔ロレーヌ〕		S	得	反
GK	ヘルド	0	0	0
GK	ネイザー	0	0	0
	グロック	13	4	2
	M・トレチカ	0	0	4
	E・トレチカ	2	0	2
	ウェーバー	2	1	0
	ロー	3	1	3
	ドマンジェ	2	1	6
	ラム	6	3	3
	ランブール	13	7	1
	ベルジェ	2	1	3
	シュールマン	1	0	0
	レエア	10	3	0
		54	21	24

(評) 体育館の広さは40メートル×20メートル、満員の盛況である。体育館始まっていらいの大入り満員、テレビ放送も行なわれた。当地のハンドボール関係者は手放しでよろこんでいた。前半日本はちょっと気を許したため15—12とリードされた。後半ベスト・メンバーに切り替えて速攻にはいり23—21と2点差でロレーヌを打ち破った。佐藤はミュールーズの試合で右目を痛めて欠場したが大したことなく。この試合での人気ものは山田である。小柄でありながら非常に動きが早いためである。フランスの新聞は筆をそろえて山田の健闘を賛えた。拍手も山田ひとりに集まり、休ませようとしたがファンにすまない気がして無理して出場してもらった。山田、竹野が好調。デフェンスも田口、服部のコンビがよかった。(高嶋監督記)

対グンメルバッハ戦　カットするは田口

ドイツ

◇第五戦（3月4日）

全日本チーム対ハイデベルク選抜チームとの試合は3月4日午後8時30分からハイデベルク体育館で行なわれ、30—30の引き分けとなった。この試合の後半に荒川研究員(日体大監督)がレフェリーをつとめた。

(評) 試合開始直後から猛烈な攻め合いとなりシーソーゲームとなった。前半は山田、高村の活躍で13—13のタイスコア。この日の日本チームは実によく動きめざまし

日本 30（17—17、13—13）30 ハイデベルク選抜

〔ハイデベルク〕		S	得	反
GK	ブレヒト	0	0	0
GK	ジモン	0	0	0
	パイス	1	1	4
	ホフマン	6	1	3
	H・トロップ	2	1	4
	E・トーヌ	4	3	2
	シューマッベル	4	4	1
	E・トロップ	6	3	8
	アスター	4	2	0
	ペーター	9	4	3
	シュタインハウザー	6	3	1
	W・ゴッマン	6	2	2
	クレペンツ	6	2	2
	A・コッマン	8	4	3
		62	30	33

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	0
△今野	0	0	0
尾藤	0	0	0
村上	0	0	1
佐藤	2	1	2
△深江	4	2	6
△服部	6	3	8
△高村	8	4	5
△田口	2	1	8
井上	2	0	0
宮原	1	1	1
△山田	15	11	5
△竹野	9	5	5
近藤	4	2	2
	53	30	43

△印＝スターテングメンバー

かった。後半は速攻の応しゅうとなり、日本は早目にメンバーチェンジして連続速攻をかけて引き分けとなった。山田はひとりで11点をあげケンパ氏はじめ日独協会の関係者は最大限の賛辞を送った。

◇第六戦（3月8日）

全日本チーム対グンメルバッハ選抜チーム（ドイツ選手権第二位チーム）との試合は3月8日午後7時30分からグンメルバッハで行なわれ日本は1点差で勝った。この試合後半に荒川研究員がレフェリーをつとめた。

日本 28（14—13／14—14）27 グンメルバッハ選抜

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	0
今野	0	0	0
尾藤	0	0	2
村上	0	0	0
佐藤	0	0	0
深江	2	2	7
服部	8	6	3
高村	8	4	2
田口	2	0	2
井上	4	1	2
宮原	0	0	2
山田	8	7	2
竹野	16	8	5
近藤	1	0	5
	49	28	32

▽グンメルバッハチームの記録
シュート63、得点27、反則28

◇第七戦（3月10日）

全日本チーム対ベストハーレン選抜チームとの試合は3月10日午後8時からゾーエストで行なわれ29—23で敗れた。

ベストハーレン選抜 29（16—12／13—11）23 日本

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	1
今野	0	0	0
尾藤	0	0	2
村上	0	0	7
佐藤	1	0	0
深江	3	0	1
服部	9	4	12
高村	1	1	2
田口	3	1	6
井上	3	0	0
宮原	0	0	1
山田	10	5	8
竹野	14	10	5
近藤	3	2	3
	47	23	48

▽ベストハーレンチームの記録
シュート65、得点29、反則31

（評）ゾーエスト体育館は横が17メートルしかなく日本得意のサイド攻撃が完全にできなかった。ベンチがゴールのうしろにあるため適切な指示ができなかったのは困った。相手チームは1800年代からある有名なクラブチームであり、極めて強力だった。（観衆千人）

◇第八戦（3月13日）

全日本チーム対ゾーリンゲン選抜チームとの試合は3月13日午後8時からゾーリンゲンのシッツェンベルク体育館で行なわれ、25—16で敗れた。

ゾーリンゲン選抜 25（14—8／11—8）16 日本

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	1
今野	0	0	1
尾藤	1	0	4
村上	0	0	0
佐藤	2	1	2
深江	1	0	1
服部	3	0	6
高村	3	2	2
田口	2	0	4
井上	1	0	1
宮原	0	0	2
山田	11	3	2
竹野	28	10	1
近藤	2	0	6
	54	16	33

（評）このチームにはハンガリーの亡命選手が二人参加していた。デフェンスはうまかった。チームワークもよく、動きにも無駄がなかったが、スピードに欠けていた。日本チームはケンパ氏のコーチがようやく身につき、目にみえてうまくなってきた。GKのリシュは36歳、前回の世界選手権の名GKであった。リシュはこのゲームを最後に引退するといっていた。

〔ゾーリンゲン〕	S	得	反
GK リシュ	0	0	0
GK ベリング	0	0	0
クロザベ	4	1	1
メッツガー	4	1	6
エベルツ	10	5	7
ビーパー	8	4	7
クルツ	2	0	0
クリジァック	6	3	6
イルガンク	5	2	0
オーベン	6	4	4
ケラ	13	5	3
	58	25	34

◇第九戦（3月15日）

全日本チーム対ギーセン選抜チームとの試合は3月15日ギーセンで行なわれ、日本は30—22で勝った。

日本 30（10—10／20—12）22 ギーセン選抜

〔ギーセン〕	S	得	反
GK シュテール	0	0	0
GK ケーラー	0	0	0
シルマー	7	3	0
ラウトマン	7	2	1
シュトラスハイム	5	1	3
リトケ	5	0	1
ボジムスキー	2	0	4
ロオ	6	3	1
F・ルウ	4	1	5
ギーベルト	2	0	1
ベックマン	11	2	1
H・ルウ	8	3	1
ラオゲーガー	6	4	2
ベーゼンブルーフ	7	3	1
	70	22	21

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	0
今野	0	0	0
尾藤	0	0	4
村上	2	2	5
佐藤	4	0	2
深江	6	3	3
服部	2	1	2
高村	11	5	5
田口	1	1	4
井上	2	0	1
山田	12	5	3
竹野	14	9	5
近藤	7	4	3
	61	30	37



対グンメルバッハ戦，高村のジャンプシュート

ハンドの神様ケンパ氏来日？

ドイツハンドボール界の第一人者といわれているケンパ氏が来日する予定。これは式場団長、高嶋監督がケンパ氏に会い、コーチとして来日してもらいたいと申し入れた。ケンパ氏は内諾したので選手団が帰国後、細部にわたって交渉することになった。ケンパ氏はドイツ国内ならどこへ行っても顔を知られている。日本チームがカールスルーエ駅を出発するとき、ケンパ氏がわざわざ見送りにきた。このケンパ氏の姿を巡査がみつけ、日本チームの荷物を車内まで運んでくれた。ケンパ氏の顔を知らないものはないという。日本の子供が〃巨人の長嶋〃を知っているように……。まさにハンドボールの神さまというところ。



（評）ギーセンチームは1956年にスペインのナショナルチームを27―24で破った記録を持っている。しかしデフェンスのもろさはひどく、そのうえロングシュートが悪かった。日本としてはいままでにいちばん楽なゲームだった。サイドが24メートルもあったのでやりやすかった。

◇第十戦（3月16日）

全日本チームは3月16日フランクフルトで日本、フランクフルト選抜、マインタウンス選抜の三チームによるリーグ戦を行なった。試合は15分ハーフ、日本はマインタウンスを13―12、フランクフルト選抜を13―12で破り2勝した。

日本 13（3―5、10―7）12 フランクフルト選抜

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	0
今野	0	0	0
尾藤	1	0	3
村上	0	0	0
佐藤	0	0	0
深江	3	2	2
服部	3	3	4
高村	2	0	5
田口	5	2	5
井上	1	0	0
山田	3	1	2
竹野	13	4	3
近藤	1	1	3
	32	13	27

〔フランクフルト〕	S	得	反
GK ベルグマン	0	0	0
ホイザー	6	2	2
シュトラースン	11	4	7
ビュンシュ	2	1	1
ブライヘンバッハ	2	1	0
フィバンガー	6	2	8
ワグナー	0	0	0
マイティクス	3	0	1
シューマッハ	2	0	0
ゼーク	0	0	1
ベルナー	2	1	1
ハニッシュ	4	1	0
	38	12	21

◇第十一戦（3月16日）

日本 13（6―5、7―7）12 マインタウンス選抜

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	0
今野	0	0	0
尾藤	0	0	0
村上	0	0	5
佐藤	2	1	0
深江	3	2	5
服部	2	1	2
高村	8	4	3
田口	1	1	1
井上	2	0	0
山田	7	3	1
竹野	4	0	3
近藤	5	1	3
	34	13	23

〔マインタウンス〕	S	得	反
GK シュテーナー	0	0	0
GK ソオルマン	0	0	0
エンデルス	15	7	1
ニックス	4	2	2
ハッケル	1	0	5
ノイザー	3	0	2
ローレンツ	1	0	1
シュバイダー	0	0	0
ガイス	2	1	0
ゴットリック	3	0	1
フレンツュル	5	2	1
	34	12	13

チェコ

◇第十二戦（3月19日）

チェコにおける第一戦は3月19日午後8時からプラハでチェコ選抜チームとの間で行なわれたが、日本は37―20で敗れた。この日午前8時に起床し、9時から市内見物、昼食は日本大使館でごちそうになった。スキ焼き、ソバ、米、たくわん、うめぼし、のり、番茶などが出て選手団をよろこばせた。

チェコ選抜 37（17―7、20―13）20 日本

〔日本〕	S	得	反
GK 福本	0	0	0
GK 今野	0	0	0
尾藤	0	0	2
村上	1	0	1
佐藤	0	0	0
深江	2	1	1
服部	2	1	3
高村	10	4	6
田口	1	1	5
井上	3	1	3
宮原	0	0	0
山田	15	5	3
竹野	15	5	4
近藤	3	2	0
	52	20	28

チェコ	S	得	反
GK ペトル	0	0	0
GK スタニスラル	0	0	0
カレル	5	2	3
ジリ	3	3	1
ビレム	12	7	3
ミラン	11	7	2
ヤン	5	4	3
ミロスラフ	7	4	8
ゲスタフ	6	4	1
カレル	3	1	2
ヤロスラフ	5	2	5
ヨセフ	3	3	4
	60	37	32

（評）チェコのボールのさばき、体さばきは実にみごとだった。速攻のすばらしさ、強引な個人プレーには全く手も足もなかったといっていい。日本も前半は五分五分に戦った。これはクロスパス、クロスからのシュートがよく決ったからだ。後半はなにかもたついてコンビが悪く、体力の差、スピードの差がそのまま得点に現われた。チェコではメンバー交替の規則をよくまもり、日本はメンバー交替の反則をとられた。ゴールインしてデッドとなったときは、入り乱れてゴールエリア内に出入りできるが、インプレーのときはできない。高村が7メートル投の反則で2分間退場を命じられた。日本はコンビをうまく組み合わせようと苦心した。またチェコの速攻をいかにして防ぐかベンチで作戦を練った。シュートした球がゴールインしょうが、ゴールポストに当たろうが、キーパーボールになろうが、シュートした瞬間からプレーヤーは帰陣しなければならないことをあらためて認識した。後半はミスが多く速攻が出なかった。チェコはみんな大柄選手であり、日本のデフェンスとしては相手の手、あるいはボールに飛びついて阻止しなければどうにもならなかった。このゲームでインドアにおける多くの教訓を得た。これは大きなプラスとなった。（松本コーチ記）

◇第十三戦（3月21日）

全日本チーム対北ボヘミアン選抜チーム（チェコ）との試合は3月21日当地で行なわれた。日本は前半の失点を後半にはいってとりもどし大接戦となったが、惜しくも1点差で敗れた。

北ボヘミアン 21（10―13、11―7）20 日本

◇第十四戦（3月22日）

チェコでの第3戦、日本対モラビア州選抜チームの試合は3月22日午後7時30分からオストラバ市で行なわれ、日本は29―23で敗れた。

モラビア 29（21―12、8―11）23 日本

コボレバナシ

◎高嶋監督の手紙から

渡欧中の高島監督から三日に一度の割で航空便が届いた。あの忙しい日程のなかで長文の手紙を書くのはほんとうにご苦労な話です。数多い手紙のなかから〝おもしろい〟ものを拾ってみましょう。

（修身、道徳の型）1961年2月22日は日本ハンドボール協会にとって記念すべき日になりました。それは七人制の国際試合において初めて勝利を収めた日です。選手は実によくやりました。筆に表現できませんが、ほんとうに精魂つき果てるまで競技しました。

（自宅連絡懇願の型）家に手紙を書いている暇がありません。元気だと電話しておいてください。

（勝利感激の型）ついにまた勝ちました。堂々正攻法で破りました。

（弱音の型）奈良君、君のいちばん心配していたことが現実となって困ったものだ。

（業務熱心の型）宮崎さん、登録チームの件、よろしく頼みます。内山さん欠勤しないでしっかりや

〔日本〕	S	得	反
福本	0	0	0
今野	0	0	0
尾藤	1	0	1
村上	1	0	5
佐藤	6	2	5
深江	3	0	1
服部	13	8	6
高村	7	1	1
田口	3	1	0
井上	4	1	1
宮原	1	0	0
山田	4	1	1
竹野	22	8	4
近藤	1	1	4
	66	23	92

（評）チェコハンドボール協会長が自らレフェリーとなってゲームが始まった。前半日本チームはよく動き、竹野、服部が巧みなプレーでモラビヤの逆をついた。モラビヤはこのプレーにあわて、前半11—8と日本がリードした。後半になるとモラビヤはロング・シュート、ロング・パスで反撃に転じ、日本は手も足も出なかった。後半17分17—17とタイとなった。ミロザブ、ミランの二人にかき回された形。竹野のシュートが決まらず高村、山田、佐藤の不調で勝てる試合を失った。（松本コーチ記）

〔モラビヤ〕		S	得	反
GK	ヤロミール	0	0	0
GK	オト	0	0	0
	ロバート	6	3	3
	ビート	5	2	6
	オスカー	5	2	6
	ミロサブ	13	6	7
	ミラン	15	11	5
	ヨセフ	0	0	3
	ボクスラフ	0	0	1
	バルテル	4	1	2
	ヤロスラグ	4	3	5
	パベル	1	0	4
	ボフミル	3	1	0
		56	29	42

ルーマニア対チェコ戦から—チェコの7mスロー

◇**第十五戦**（3月24日）

チェコでの第4戦、全日本チーム対東スロバキヤ選抜チーム（チェコ）の試合は3月24日午後7時40分からチェコのコシス市体育館で行なわれ、日本は34—13で敗れた。

東スロバキア 34（18—5 16—8）13 **日本**

〔日本〕		S	得	反
GK	福本	0	0	0
GK	今野	0	0	0
	尾藤	0	0	0
	村上	2	0	0
	佐藤	4	1	3
	深江	4	1	1
	服部	7	1	5
	高村	4	1	5
	田口	1	1	4
	井上	8	2	3
	宮原	0	0	1
	山田	6	1	0
	竹野	15	5	8
	近藤	3	0	0
		54	13	30

〔スロバキア〕		S	得	反
GK	セラーチェック	0	0	0
GK	トムコ	0	0	0
	バラネック	8	5	1
	トムコ	7	5	2
	オンドビッチ	7	5	2
	フェロ	10	6	3
	アイベル	2	2	2
	ルコシック	14	4	3
	ステレラツ	0	0	1
	ムルゴニュ	3	3	2
	バラネック	4	3	2
	バコー	3	1	1
	トムチック	0	0	0
		58	34	19

（評）東スロバキア選抜チームにはフェロ、ルコシックの世界選手権出場選手を加えかなり強力なチームであった。すべり出しは5—1と日本がリードした。これはクロス・パス、細かいパスからの早いモーションのシュートが成功したからである。しかしその名を誇る東スロバキア選抜チームはデフェンスの間を詰めて幕を張り、日本のシュートをカット。そのこぼれ球を拾ってすぐ速攻にはいり、簡単に反撃されて手も足も出なかった。完敗というほかはない。この試合で気づいたことはデフェンスの場合に人の体に対するデフェンスとボールに対するデフェンスとをマッチさせることである。またシュートは下よりも逆をついた中間の高さ、あるいは上の方がよく決まるように思えた。日本のGKは健闘したが、疲労のためかいつもの好プレーが出なかった。（松本コーチ記）

◇**第十六戦**（3月25日）

全日本チーム対西スロバキア選抜チームとの試合は3月25日午後7時20分からブラチスバラ市で行なわれた。日本は後半大いに善戦した。前半の失点をばん回するに至らず、25—21で敗れた。

西スロバキア 25（11—13 14—8）21 **日本**

っているかね。

（女性恋しの型）着陸してみたらコザック姿の妙麗なお嬢さんがふたり花束贈呈。いままでシュンとしていた選手一同とたんに元気。役員まで先を争って記念撮影。考えてみればもう一カ月以上、無理もあるまい。

（欲ばりの型）欲をいえば赤い線で囲っておいてほしかった。どこにあるのか、さがすだけでも時間がもったいない。（注＝これは東京から新聞を送ったので、これに対する返事。ハンドボールの記録があまりにも小さいのでさがすのに苦労したらしい。）

（自己反省の型）世界選手権は確かに完敗したが、小生あまり悲観していない。あの「ふん囲気」とあの「大観衆」を前に初めての世界選手権にしてはよくやったと思っている。

中沢マネのハガキから

「飛行場からパリ市内に通じる道路は非常に広く、第二京浜国道の約二倍半。立体交叉が完全です。建物も戦災にあわないだけに古式豊かで、車も人も多いのですが、非常におっとりした環境です。建物は建築中のものが多く、柱などものすごく細いもので、アパートは大体11—13階ぐらいが普通です。」

〔日本〕	S	得	反
GK 福本	0	0	0
GK 今野	0	0	0
尾藤	0	0	0
村上	0	0	3
佐藤	6	3	4
深江	2	0	2
服部	7	3	12
高村	5	1	2
田口	5	2	13
井上	6	4	7
宮原	0	0	4
山田	10	4	2
近藤	9	4	8
	50	21	57

〔西スロバキア〕	S	得	反
GK ブリーク	0	0	0
GK ヤロッシュ	0	0	0
コレスーク	2	2	2
ツイムラ	1	0	1
ハデラバ	6	5	10
インベルゲル	2	0	2
ポラーク	2	2	2
ハンズリーク	1	0	2
ウヘーリーク	6	5	6
ルカショビッチ	4	1	2
クレダーテス	0	0	0
チャニガ	24	10	13
ケチケメーテ	0	0	0
	48	25	40

（評）昨24日の対東スロバキア戦で竹野が右足を捻挫し、この試合欠場したのが大きく響いた。それにもかかわらず全員猛烈なファイトを燃やして戦かった。しかし前半はチェコの速攻とデフェンスの虚をつくバックシュート、さらに7メートルスローなどで10―1と大きくリードされた。12分ごろから日本も調子をとりもどし、クロスパスを主に強引にチェコのデフェンスに割り込む作戦が成功して点差をつめた。後半は日本のペースとなり、23分には2点差にこぎつけたが、どうしてもばん回できなかった。（松本コーチ記）

フランス

◇第十七戦（3月27日）

チェコでの国際試合を終った全日本チームは再びフランスにもどり3月27日午後9時45分からパリ郊外のサンモール市アンリーパテ体育館でフランス・ステラー・チームと対戦し、24―22でステラーを破った。

日本 24（12―9 / 12―13）22 ステラー

〔日本〕	S	得	反
GK 福本	0	0	0
GK 今野	0	0	0
尾藤	0	0	0
村上	0	0	5
佐藤	1	0	0
深江	3	0	6
服部	5	0	13
高村	0	0	0
田口	2	1	8
井上	2	1	1
宮原	0	0	0
山田	0	2	2
竹野	34	17	9
近藤	6	3	3
	59	24	47

〔ステラー〕	S	得	反
GK モナン	0	0	0
GK セビョー	0	0	0
ルモン	1	0	1
ジュペール	7	2	1
バンダン	11	4	4
ドーゾッピ	27	10	6
パトー	7	4	5
ヤコビデー	3	0	2
デシャン	5	1	2
ビカール	1	0	2
ロション	6	1	4
	68	22	27

（評）フランスにもどったらいままでチェコ国内にいたような緊張感がいっぺんに抜けた。チェコでは完敗したが、フランスなら勝てるという自信がそうさせたのだろう。前半苦戦して1点リードされたが、後半みごと逆転した。ステラーで図抜けていたのは5番のドーゾッピでロングが得意、チームそのものはそれほど恐いとは思わなかった。デフェンスが荒く、ガラの悪いチーム。後半日本が終始リードし、ステラーの反撃も鋭かった。レフェリーのジャッジは日本にからく、ステラーに甘いようだったが、やむを得まい。（松本コーチ記）

◇第十八戦（3月29日）

日本 26（18―10 / 18―10）20 ノルマンデー

◇第十九戦（3月30日）

全日本チーム対デジョン選抜チーム（フランス）との試合は3月30日午後9時20分からデジョン市で行なわれ、日本は20―22で敗れた。

デジョン 22（13―11 / 9―9）20 日本

〔日本〕	S	得	反
GK 福本	0	0	0
GK 今野	0	0	0
村上	2	0	6
佐藤	1	1	2
深江	4	1	4
服部	3	1	12
高村	1	1	0
田口	1	0	8
井上	3	2	0
宮原	0	0	1
山田	7	2	1
竹野	14	11	4
近藤	3	1	3
	39	20	41

〔デジョン〕	S	得	反
GK ドケゼル	0	0	0
ドュタン	8	2	12
バギュール	12	3	9
ジョッホ	3	1	2
グウード	3	1	1
ボエット	7	1	1
ブリゾー	2	1	0
ウエ	0	0	0
ウェッドマン	6	3	0
セレネ	11	7	5
（選手名不明）	5	3	1
	57	22	31

（評）デジョン・チームはフランスのベスト4にはいるチーム。試合は負けたけれどそれほど強いとは思わない。前半は速攻の応しゅうで好ゲームとなった。日本は常にリードしていたが、デジョンの速攻を防ぎ切れず9―9で前半を終った。後半も日本がリードし後半20分までは5点差をつけた。ところが余裕を持ってメンバー・チェンジしたのが悪く、デジョンの反撃を許した。タイムアップ2分前には20―20のタイにされ、ついに逆転負けした。（松本コーチ記）

◇第二十戦（3月31日）

フランスでの最終戦、全日本チーム対ブルゴーニ選抜チーム（フランス）との試合は3月31日午後8時からオクセール・マルシェ・ホールで行なわれ、日本は33―15で最終戦を飾った。

日本 33（16―6 / 17―9）15 ブルゴーニ選抜

〔日本〕	S	得	反
GK 福本	0	0	0
GK 今野	0	0	0
尾藤	0	0	0
村上	2	1	8
佐藤	1	1	1
深江	2	0	1
服部	8	4	9
高村	11	5	2
田口	2	2	5
井上	6	2	2
宮原	0	0	3
山田	4	2	3
竹野	19	14	4
近藤	3	2	7
	58	33	45

▽ブルゴーニ選抜チームの記録
シュート53、得点15、反則36

（評）日本のワンサイド・ゲームに終った。混成チームなのでプレーはまずく、話にならなかった。日本は得意の速攻でブルゴーニのバックスを簡単に破ってフランスでの最終戦をみごとに飾った。観

コボレバナシ

▽…初の海外遠征とあって日本に残留している連中は国際試合の結果を首を長くして待っていた。ことに第一戦は2月19日パリのフランス軍隊チームなので〝結果はどうだろう〟。これはハンドボールファンの願いであった。外国のニュースが入電するのは共同通信社がいちばん早い。ハンドボール愛好者である同社の鷲尾記者は20日朝早く出社し、入電と同時に協会関係者に連絡してくれた。残念ながら日本は第一戦を失ったが、共同通信社の好意には感謝している。22日のリヨン選抜、25日のアルザス選抜、26日のミュールーズ選抜との試合には協会常務理事の的場さん、芝浦工大の三浦元秀教授、大崎電気の渡辺社長の自宅へ鷲尾記者がわざわざ電話をかけ、成績を知らせて下さった。本当にありがたいことです。やはり共同通信社は日本を代表する通信社です。

▽…新聞紙上には選手の活躍をくわしく掲載し、個人テーブルまであったのにはおどろいた。日本チームがリヨン選抜に勝ったときは東京タイムズが三段抜きで「19年ぶりの勝利、日本、外国チームに勝つ」と報道した。昭和17年に当時の訪日ドイツ艦隊を8―7で破っていらいのこと、こんなにくわしく書いてもらったのはうれしかった。

衆八百人。（松本コーチ記）

イスラエル

◇第二十一戦（4月4日）

全日本チーム対イスラエル選抜チームとの試合（十一人制）は4月4日午後3時15分からテラビブ市（イスラエル）で行なわれ、16—15の1点差で日本が勝った。

日本 16（8—9、8—6）15 イスラエル選抜

〔日本〕		S	得	反
GK	福本	0	0	0
GK	今野	0	0	0
	村上	0	0	9
	佐藤	3	0	0
	深江	0	0	1
	服部	2	1	2
	高村	7	2	1
	田口	0	0	6
	井上	5	1	2
	宮原	0	0	0
	山田	4	2	1
	竹野	12	8	0
	近藤	4	2	0
		37	16	22

〔イスラエル〕		S	得	反
GK	シャピラ	0	0	（不明）
GK	ハルペリン	0	0	
	バグナー	0	0	
	ペートシック	0	0	
	ダビドソン	1	1	
	ローゼンステイン	0	0	
	マーカス	3	1	
	ラングベイク	7	3	
	センドラー	22	8	
	ラジ	4	1	
	パイアー	2	0	
	シャニー	3	0	
	フェルドマン	0	0	
	マンドラー	4	1	
		46	15	

（評）海外遠征初の十一人制、グラウンドは超満員だった。イスラエルは日本に対して非常に好意を持っていたので、ゲームはたのしかった。日本は前半イスラエルにリードされたが、後半逆転し、1点差で勝った。

◇第二十二戦（4月7日）

全日本チーム対全ハポエル（イスラエル）の試合（十一人制）は4月7日午後3時30分からペタティクワ市（イスラエル）で行なわれ、日本の楽勝に終った。

日本 23（11—4、12—4）8 全ハポエル

〔日本〕		S	得	反
GK	福本	0	0	0
GK	今野	0	0	0
	尾藤	0	0	6
	村上	0	0	3
	佐藤	8	5	5
	深江	4	3	3
	服部	0	0	2
	高村	7	5	0
	田口	1	1	1
	井上	6	3	1
	宮原	0	0	0
	山田	5	3	0
	竹野	4	2	3
	近藤	3	1	1
		38	23	25

▽全ハポエルの記録
シュート47、得点8、反則17。

（評）日本は攻守ともにすぐれ大勝した。FWもバックスものびのびとプレーし、終始余裕を持っていた。

◇第二十三戦（4月8日）

全日本チーム対マカビ（イスラエル）の試合（十一人制）は4月8日午後3時30分からレオポット市（イスラエル）で行なわれ、日本のワンサイドに終った。

日本 22（12—2、10—4）6 マカビ

〔日本〕		S	得	反
GK	福本	0	0	0
GK	今野	0	0	0
	尾藤	0	0	8
	村上	0	0	8
	佐藤	7	5	3
	深江	2	0	3
	服部	1	0	4
	高村	9	3	0
	田口	1	1	5
	井上	4	3	1
	宮原	0	0	0
	山田	7	5	1
	竹野	7	2	0
	近藤	5	3	2
		43	22	35

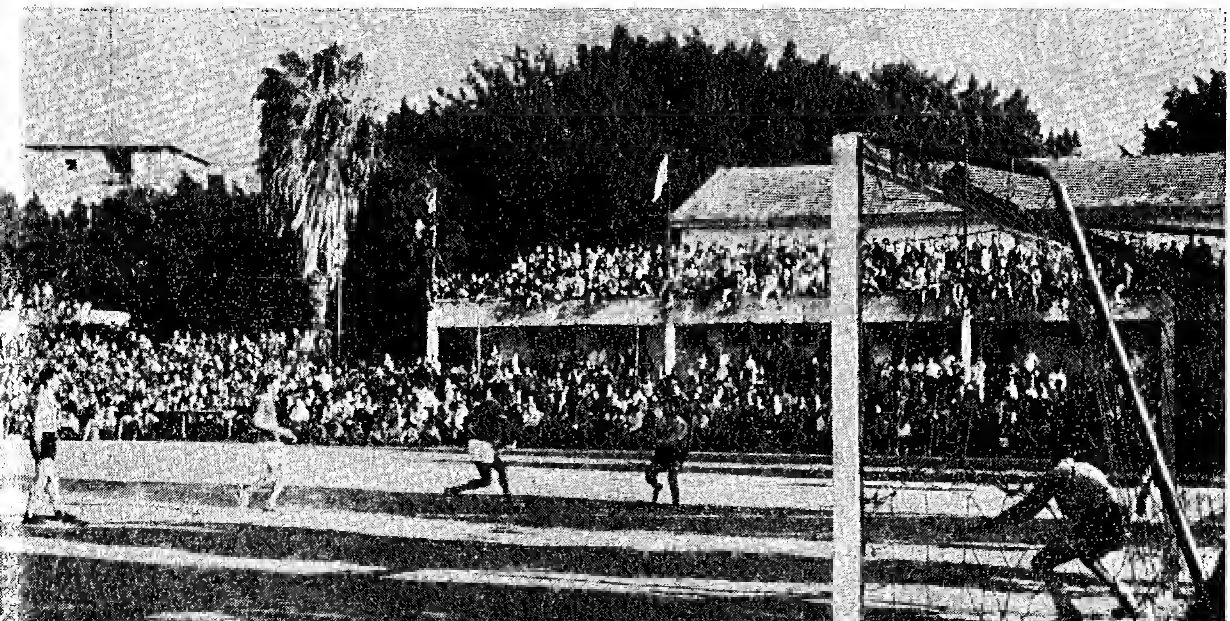
〔マカビ〕		S	得	反
GK	G・コヘン			
	ペートジク			
	ワグナー			
	シャニー			
	ダビッドソン			
	ローゼンステイン			
	V・コヘン			
	メンドラー			
	ロジー			
	ラングビル			
	ペナリ			
	シャピラ			
	イスラエリ			
	アダム			
		41	6	20

（評）遠征の最終戦で全員よく走り回った。佐藤、山田が思う存分活躍し、このふたりで10点をあげた。

コボレばなし

▽…海外遠征でいちばん困るのは外国語をしゃべれないこと。英語なら少しはわかる選手もいるが、ドイツ語、フランス語、さらにチェコ、イスラエルへ行ったのではまったくチンプンカンプン。宏輔君（佐藤君のこと）はノイローゼになり、ドイツの街かどで幼児がペラペラドイツ語をしゃべっているのをみて「子供のくせにドイツ語をしゃべつている」？？

▽…イスラエルはヘブライ語。文字も「みみず」が這っているような字体である。さっぱりわからない。中沢マネージャーは多少ヘブライ語を知っているので「ヘブライ語は右から左へ読むんだぞ。英語は左から右だが、ヘブライ語はその反対だ」となかなか学のあるところをみせた。「さすが名マネージャー」といったか、どうか聞きもらした。



遠征最終戦日本対マカビの試合，鈴なりの観衆をごらん下さい。

遠征総まくり

座談会

出席者

監督	高嶋冽
コーチ	松本重雄
主将	近藤金博
選手	竹野奉昭

司会

共同通信社運動部記者	鴛尾武治

フランス、ドイツ、チェコ、イスラエルとヨーロッパ各国を転戦した日本代表チームは25戦、13勝10敗2引分けのお土産をもって四月十日帰国した。五十三日間にわたる初の海外遠征で日本チームは何を学んできたか、遠征団の高嶋監督、松本コーチ、近藤主将、それにポイントゲッターの竹野選手に集ってもらって、さっそく総反省をおねがいした。司会は共同通信社運動部の鴛尾記者。

最大の敗因はディフェンス

司会(鴛尾) 世界選手権で日本チームはベストを尽したが、チェコ、ルーマニアに敗れて惜しくも決勝リーグに進出するチャンスを失った。その敗因はいったいどこにあったかということから……

高嶋監督 敗因としては二、三あげられると思うが、一番大きな点は日本のディフェンスに対する考え方、訓練、戦術というものが足りなかったと思うね。攻撃では絶対にひけをとらない自信を選手も、われわれも持っている。点を取るが取られることが多過ぎるというのが日本の現状だ。

司会 実際にプレーをやって見て、どういうことを感じた？

近藤 一番感じたことは、細かいプレーではわれわれも負けないが、結局体力的な差があるということですね。向うの選手は背が大きいですからね。

司会 日本がルーマニアやチェコに追いつくには、こんごどういう訓練をしたらいいか。

松本 ドイツチームが来日する前のわれわれのハンドボールは、非常にドリブルが多かったが、ドイツチームが来て、パスの妙味を見せてくれた。いまはそれを真似している段階であって、日本独特の動き、鋭さというものをどういうふうにゴールに結びつけるかが課題だと思う。ドイツが選手権で負けたのを見ても、パスワークの巧さはルーマニア、チェコにも劣らず見た目にも奇麗だが、技巧に走り過ぎて、から回りしている。結局ゴールに対する突っ込みがルーマニア、チェコの方が上だったということだと思う。

司会 遠征中の二十五試合を見てみると、そのほとんどの得点は、竹野君があげているが、竹野君に打たせるというのははじめから考えていたことなの……

近藤 そうです。やはりシュート力は竹野が一番あるから、山田、佐藤などがかく乱しておいて、竹野にボールを集めるとか…

竹野 ボールをもらった瞬間に得点するということが一番多かった。中途半端にボールを長く持っていると、相手に取られてしまうから、取ったらすぐ打ったのがよかったと思います。

近藤 バックスをしずめておいて竹野が、早いモーションで打ったというのが多かった。

松本 こんど世界選手権やいろいろの国際親善試合をやって思ったことは、ナショナルチームという一年中同じメンバーで鍛えられているようなものでないと、あれだけの強味が出てこないということだね。各クラブチームとは五分五分あるいはそれ以上の成績をあげているのだから…。フランスでも軍隊(選手権で八位)が一番強かった。日本チームは、ほかのクラブチームには勝てる実力があるのだから、いまやったら負けるにしてもあれほどの大差(36—18)でなく、二、三点差ぐらいでやれると思う。

竹野 あの時は着いてすぐだったから(笑)

世はステートアマの時代

松本 フランスもドイツの傾向に似ている。八位にはなったが、六位以内にはいってもおかしくない実力を持っている。結局勝負に負けたということがいえるんじゃないか。

司会 欧州ではステートアマということが行なわれているが、日本ではどうしたらよいと思うか。

監督 日本もステートアマの旗印を掲げないまでも、自衛隊、警察庁の協力を求めてステートアマ的なやり方をしないと、オリンピックで勝つとか、世界選手権で優勝することはおぼつかなくなると思う。これはあらゆるスポーツについていえると思う。個人主義、自由主義の発達しているフランスでも軍隊をスポーツ軍隊として、八分通りステートアマに踏み切っている。日本のスポーツ界も、そういう方向にいかないと太刀打ち出来ないと思う。

司会 地方にいる優秀なプレーヤーを東京

に集めて、協会が本腰を入れて養成していかないと、世界各国に太刀打ち出来ないということだね。

監督　現状ではやれないね。

司会　どういうわけで……

監督　まずお金の問題だね。それからハンドボール協会が、これはと思うものを指定して、一年間自衛隊候補生として久里浜の自衛隊学校に入れる。そこで優秀な指導者を三人ぐらいつけて一年中訓練をして帰ってくるというシステムが出来ればね。フランスではこういうやり方をしているんだ。

司会　日本の場合は、地方から人を呼んで指導者の講習会をやるが、外国では逆に地方のクラブチームで指導者を中央に送って講習を受けさせる。日本と外国では、全然逆なんだね。

監督　考え方が逆だね。しかしシステムは似ているわけだ。つまり外国では、地方のクラブチームが金を出して、指導者を中央に送る。日本では、中央の協会が金を出すから来いという形になっている。結局底辺の厚さと広さの問題だと思う。いいかえれば組織と歴史の差だという感じがする。

司会　こんどの遠征でフランス、ドイツ、チェコ、イスラエルの四ヵ国で試合をやって、世界選手権での二敗はあるが、十三勝十敗二分けという成績をあげて来た。この成績は満足していいと思うが。

監督　満足していいね。私自身も本当に満足している。というのはこんど遠征してきた国は、野球のアメリカ、テニスの豪州、ラグビーのイギリスというように、そこで生まれ、そこで育ったハンドボールの本場の国だからだ。そこで少くとも十三勝十敗の成績を初めての遠征でおさめられたということは上出来だと思っている。

司会　ドイツで何試合……

監督　世界選手権をのぞいて七試合。

司会　ドイツのハンドボールは、日本の野球に匹敵するものだが、ハスロッホで人口三千のうち二千人が試合を見に来たそうで、日本では考えられないことですね。しかも協会所有のハンドボール体育館があるということですが……

素晴しいドイツの体育施設

監督　ハスロッホはドイツでは、ハンドボールの発祥地で、歴史も古い。三千ぐらいの小さな町だが、町長以下全員がスポーツをすること、スポーツマンになることに非常に誇りを持っている。だから地方の協会が、体育館を建てるというとそこの有志が何百坪の土地を無償で寄贈してくれる。建ったあとは、ハンドボールだけでなくあらゆるスポーツが、維持費として五百円程度出すだけで、自由に練習をしている。これは結局協会組織の違いだと思う。日本でもラグビー協会が専用グランドを持っているように、歴史が古くなり、協会の組織が確立してくれれば、必ずしも不可能ではないと思う。

松本　ドイツ国内では、プロサッカーが非常に盛んで、ちょうど日本のプロ野球と似ているんだが、そのプロサッカーが建てたスポーツシューレ（体育学校）が各地にあって、おもにサッカーの研究をしている。そこは宿舎も完備しており、サッカーだけでなく、ハンドボールにも、陸上競技にも、すべてのスポーツに解放している。また普通の学校は体育館を持たず、町が持っている。学校は勉強するところで、体育の時間には、町のバスで体育館に行く。スポーツをやる施設は町中にあり、朝と晩は町がそれを使い、昼間は学校が使うということが実にうまくいっている。あらゆる面で組織が違うということを感じた。

司会　フランスでの第二戦で、リヨン選抜に勝った時どんな気持ちだった。

近藤　あの時は本当にうれしかったですね。

竹野　勝てるとは思わなかったから……

司会　記録を調べてみたら、外国チームに勝ったのは十九年ぶりなんだね。ぼく自身驚いたんだから、向こうでも驚いたと思うが、松本君は最初勝てると思った？

松本　第一戦に負けてるだけに、負けるんじゃないかと思ったね。

近藤　選手としては、第一試合に大差で負



Adversaire inédit de la France, dimanche à Coubertin

LE HANDBALL JAPONAIS
a déjà 39 ans d'existence
et 83.160 licenciés

FERIGNAC, ATTENTION !

Guy CAUBERT.

フランスのスポーツ紙「レキプ」は日本ハンドボールチームのフランス訪問を大歓迎し、連日紙面を割いて報道した。このスポーツ紙はフットボール、サッカー、自転車、ラグビー、ハンドボールの欄があって扱い方も日本では考えられないほど大きい。写真はその切抜きで一番上に「HANDBALL」とある。この記事は日本ハンドボールの歴史をくわしく書いてあり、見出しは「日本のハンドボールの登録選手は 83,160 人」。写真は1月の全日本室内総合選手権大会男子決勝の大崎電気対全日体大のゲーム。竹野（大崎電気）がシュートしたところです。



ルーマニアチームとユニフォームを交換した日本選手

けているから、なんとか対等にやっていこうという気持で、やれるだけやったね。

竹野　写真などでは、右投げだったら右の方から出ていってシュートするのを見たが、実際にやるかなと思っていたら、サイド攻撃やるにしても、本当にサイドから中に飛び込んで得点するのでびっくりした。ぼくもやりたいないと思った。(笑声)

近藤　サイドからのシュートは日本では見られないな。

司会　ドイツとフランスとどっちがやりいい？

松本　結果からいえば、クラブチームだったら同じだが、ドイツの方が個人技のすぐれたものがいて、年令の差からいってちょっと上という感じがする。

チェコが実力では世界一

司会　選手権で負けたあと、チェコに行ったわけだが、チェコは強い？

松本　実力は世界一だと思う。選手権ではルーマニアに負けたが、あれは優勝戦というふん囲気と好運がルーマニアに傾いていたということで、やはりチェコの方が上だ。チェコのボールの扱いやシュートの技術はサーカス的だよ。われわれの出来ないような方法でパスするからね。

竹野　スウェーデンもすごいですよ、ボールをまたの下からパスしたり……(笑声)、頭の上から自由自在にパスしている。

司会　日本でやればスタンドプレーといわれるな……(笑声)

竹野　そのパスが全く正確なんだから、ポストにはいっているものがよく見ているわけですね。

司会　軽業的なスウェーデンが、チェコ、ルーマニアのスピードと力強さに負けたわけだ。

竹野　シュートの確実さでは、ルーマニアが一番ですね。

松本　七人制の場合、キーパーをのぞく六人がバックスもホワードもなく動いている。日本では五人で攻撃をして、一人が中途半端な位置に出ているが、これでは速攻を食い止める力にはならない。なぜ六人で攻撃し、六人で守らないのかといわれた。

司会　どういうぶつかり方をするの？、ぼくら日本ではそんなゲームを見たことがないが……

松本　キーパーの技術が違うんだ。小さい時からやっているサッカーの技術だと思うが、足が常にボールの方に行く。そしてボールにぶつかるような感じで防いでいる。

近藤　日本のキーパーは手で止めるが、からだ全体で止めるという感じですね。

竹野　うしろにタンカが置いてある。(笑)ポストプレーでポストのものがボールをとった瞬間、キーパーが前に出て来ている。そのタイミングが実にいい。

司会　日本のキーパーはゴールの前にいるが、その点大きな違いだね。

近藤　日本のチームは受け身なんです。

松本　向こうはボールが投げられる位置で止めている。

監督　キーパーのプレーは非常に勉強になった。映画なんかではわからない面だよ。(笑声)

司会　遠征中、前に出てくるプレーをキーパーの福本君なんかやったの？

近藤　やったけれどもちょっとタイミングが悪い。うまくいったこともあるが……、キーパーはボールを取るだけでなく、ドリブルとかあらゆるプレーが出来てこそキーパーといえると思う。

司会　これからキーパーに対する考え方を変えなければいけないね。ところで日本の実力は、七人制で何番目ぐらいだろう。

七人制で日本は七、八位

松本　七、八位ぐらいではないかな。選手権でもほかのグループにはいっていたら、決勝リーグまでいけたと思うね。

司会　監督は？

監督　七、八位から十位までの間には、いまのチームならいけると思う。

司会　チェコ、ルーマニアのグループにはいって負けたが、くやしいと思った？

近藤　思いませんでした。早く負けていろ

選手団の手紙から拾う

▽…インドアに関しては、日本人は体力では勝てない。要するに変化のあるプレーでこの弱点を補うことである。下手投げのシュートもそのなかのひとつ。これもバウンド・シュートと、上にしゃくり上げるシュート、早いチェンジ・パスなど。やはりいまからでも日本が伸びて行くためにも、あらゆる種類の変化あるプレーで乗り越えること。ドイツのケンパ氏にいろいろコーチしてもらった。攻撃方法に3・3・4・2の型…(佐藤君の手紙から)

▽…室内ハンドボールはやはり長身な人たちでなければ2メートル近くもある外人たちにはとうてい太刀討ちできません。チェコは全部の選手が1メートル80以上、ルーマニアにしても2メートルに近い人がいました。防ぎようがないくらいです。……(村上君の手紙から)

▽…頭の上でボールを回されてはどうすることもできません。(福本君の手紙から)

▽…リヨンとアゴンダージュは大きい選手たちでした。プレーはボールを片手でつかんで振り回し、腕力が大変です。ノーマークのときはGKが前に飛び出してぶつかってきます。……横パスは絶対に通らないけれど、縦の切り込みからのシュートは、はいらないかと思ったけれどスピードのない服部あたりでもよく決まりました。日本へもどれば若干プレーの目が開けてくると思います。ここではっきりいえることは原則(プレー)理論は身長、腕力のいかんを問わず絶対に外国でも通用します。外国チームもこれを完全にこなしています。(中沢マネージャーの手紙から)

いろ勉強できてよかったですね。

司会 アイスランドやフィンランドのようなB級チームに負けたらくやしいと思うだろうが……。ケンパ氏に会ったそうだが……。

監督 三月一日カールスルーエから、日本チームをたずねてくれて、約一週間いろいろ教えてもらったわけです。ケンパ氏は現在ドイツのハンドボール界をフイック氏と二分しているといわれるくらいの人で、俗な言葉でいえばハンドボールの神様とまでいわれている人だ。この人から学んだということは、日本チームにとって非常な勉強になり、団長以下役員、選手にいたるまで全く謙虚な気持ちで聞いたわけです。これが選手権以後の日本チームのために役に立ちました。

司会 近く、ケンパ氏が日本に来るとか聞いているが……

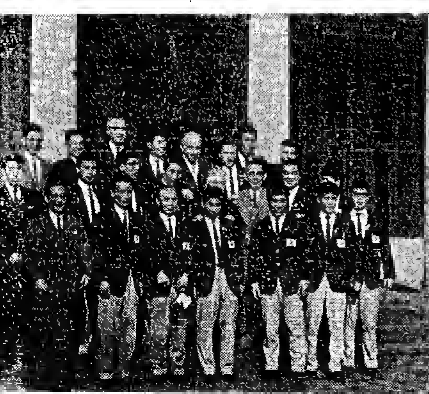
監督 こちらではいまから計画をたてる。問題は費用だが、早ければことしの夏ぐらいに呼ぶようにしたいと思っている。

司会 イスラエルでは、初めて十一人制をやって三戦全勝したけれども、その時の様子を……

監督 第一戦のイスラエル・ナショナルチームとは16―15で辛勝したわけだが、これはいままで夜の試合ばかり四十日以上やって来たのが、イスラエルにはいったとたんカンカン照りの昼間、しかも十一人制でやったから接近した試合になったわけだ。その後の試合は、こちらもなれて大勝できた。イスラエルのレベルは、ちょうどわれわれが昭和三十一年に初めてドイツを迎えたころの、ハンドボールに対するものの考え方、選手の気持ちと同じぐらいですね。一人の選手がボールをドリブルして独走し、なんとか自分でゴールに入れようとする、いわゆる原始的なプレーがまだ残っている。われわれは、イスラエルのハンドボールそのものからは何も得るところはなかった。しかしイスラエルが、三千万人もの人が祖国を追われ、ばらばらになった民族が、一九四八年の独立戦争によって、自分たちの祖国を勝ちとり、いま真剣に近代国家建設に打ち込んでいる。その姿からわれわれも選手も非常に大きなものを学んで来た。また日本の選手団の行動や態度が非常に賞賛され、武野特命全権公使からも国家のためにも喜ばしいことだとお礼まで受けた。こういう点では、いままで知られなかったイスラエルと日本の関係にとって大きなプラスになったと思っている。来年イスラエルのチームが日本を訪問することになると思うが、国際交流が開らかれたという点だけでもイスラエルに寄り試合をしてよかったと思っている。

強くなるには海外遠征

司会 初の海外遠征で学んだものは?



ドイツ大使館前で記念スナップ

松本 これはどんなスポーツでもそうだと思うが、初の国際試合では、いかに精神修養したり、遠征前に猛訓練しても、十分実力を発揮することができない。数多くの国際試合をすることがまず第一だ。その点日程のつまっている中で、数多くの試合をして来たということが一番よかったと思う。こんど遠征するにしても、その中の何人かが遠征の経験者ということになれば、また違ったふん囲気で試合ができると思うね。

司会 一万五、六千人もの観衆の前でやったのは初めて?

近藤 初めてです。

竹野 天井まで鈴なりという感じだった。(笑声)

司会 昔の国技館が満員になった時と同じ感じだったわけだね。近藤君はプレーヤーとしてどういう点を学んで来た。

近藤 体格がすごく違うということを感じました。竹野君のような大きいのが二人ぐらいいれば、もっといい成績が残せたと思った。

司会 竹野君はポイントゲッターとしてなにか学んで来たと思うが?

竹野 相手は皆んな大きいし、ぼくたちが打っても無理なシュートが多い。無理な体勢からでは、シュートがはずれることが多くなるが、どんな不利な体勢からでも得点が出来るように勉強していきたい。皆ながそういうふうになっていけば、日本のチームもどことやっても対等にやれると思う。

司会 本日は遠征帰りでお疲れのところをありがとうございました。こんどの遠征の貴重な体験を生かして、こんごもハンドボールのためがんばって下さい。(了)

ちょっと一言

欧州遠征チームからこまかな報告がきているが、『あんな無理なスケジュールでよいのかなー』と心配になってきた。旅なれない異国でのことだけにその感を深くする。食事の問題、乗物、レセプション、試合と全く超人間的な活躍振りである。それについて一言の不平もなく、朗らかな便りだけに団長はもちろん監督、コーチの苦心のほどがうかがえる。こうした無理なスケジュールをたてるについては、より多くのものをキャッチしたいという点が考慮されてのことだった。こうした努力を続けている選手団への批判は、感謝という気持ちの批判ではないのが残念である。よく理解されないのが残念だ。それにしても他人の足を引くような言動は慎しみたいものだ。選抜について全員が満足できる線ではなかったかもしれない。しかし選考委員会の当事者にしてみれば、選手全体のひとりひとりについて各方面からの条件を考慮し、ベストをつくして選抜したのだ。それが全員を満足させる結果でないとしても全般的な目から見てやるべきであろう。決定した以上はその決定の線にしたがうのがスポーツマンの態度ではないかと思う。ハンドボールのルールをいまさら書き立てる気持は毛頭ない。ことハンドボールに関係しているものなら、だれもが理解できることではないのか。こんな末節的なことは、第二、第三義的に考えてほしい。むしろ全員が大手をひろげてあたたかい気持ちで迎えてやるべきだ。

本場仕込みの好技を披露

―対関東学生選抜帰国歓迎試合

世界選手権大会出場の日本チーム（日独友好百年祭スポーツ代表使節団）の帰国歓迎試合は4月11日午後3時から新宿体育館で解団式に引き続いて行なわれた。解団式には秩父宮妃殿下、塩沢体協事務局長ら関係者の多数が出席。式場団長から妃殿下に日章旗が返還された。

日本 39（19—7、20—14）21 関東学生選抜

（評）日本チームは海外遠征で磨いたワザを十二分にみせてくれた。ボールのさばきが実にうまく、スピードがあって少しもムダがない。ゴール前にくると激しいローリングパスで学生のバックスを左右にふり回していた。山田のアンダーシュート、佐藤の好シュートはすばらしかった。いちばん目についたのはGKの長足の進歩である。出発前はゴールポストの前で防禦していたが、相手チームの選手がシュートしょうとした瞬間、前に飛び出し、からだでこのシュートを防いだ。そればかりでなく足さばきがみごとでワンバウンドシュートのとき、バウンドする前に足で止めていた。このプレーはいままでにみられなかった。とにかくすばらしい成長ぶりだった。（おしお）

山岡氏の話 期待どおり見違えるほどのたくましい成長ぶりだ。後半は疲れが目立ったが前半は学生チームを寄せつけず圧倒的な強さをみせた。何よりも鋭さが増した。

選手団帰る日

的場益雄

バスで羽田空港にかけつけると、到着時刻約二十分遅れるということであった。飛行機は、汽車のように正確にゆかぬらしい。七時すぎると迎えの父兄や学生などがぞくぞくロビーにつめかける。特別入場許可の鑑札で下の待合室に出向く。やがて蛍のような明滅する地上と空の彼方から爆音が聞えてきた。爆音はみるみるうちに大きくなる。いよいよ着陸だ。銀色の巨体が闇の中にぎらりと光る。爆音は一段と耳をつんざくばかりだ。この人間が製造した大きな鳥は、はるばる印度洋を翔破し、支那大陸を経て、ここにハンドボール選手団を運んできたのだ。今更ながら人間の偉大さを痛感する。みとれていると「あの後の方に選手団がいるんですよ」という隣の渡辺さん（大崎電気社長）の声に我に返える。ややしばらくして式場団長以下選手団がタラップに顔を見せる。突然待期していた歓迎桟橋からブランスバンドが闇の空港に鳴り響く。ニュースのフラッシュで辺りが急に明るくなった。皆の顔が嬉しそうにほころびている。私はほっと安心した。高嶋監督や松本コーチからの便りで選手団は相当疲れてきっていると心配していたが、案外元気だ。顔も真黒に陽焼けし、なんとなく逞しい感じがする。先頭にいた荒川君（審判員兼視察員）に握手する。『ご苦労さん。よかったなあ―』と握手にもつい力が入り、声がふるう。案内して待合室に行く。先客がいるので税関の手続きが案外手まどりやきもきする。やっと手続きがすみ階段を上ってロビーに向う。

ロビーは大変な人の山だ。足の踏み場もないほどである。期せずして相手がわく。今日は特に歓迎、歓迎が主なるため選手団をすぐ特別待合室に案内することになっていた。先頭で案内する自分ですから歓迎の波によろほどである。

「お母さん、お父さんがいたよ」どこか観衆の後に声がする。列の間をぬって待合室に行くにも容易なことでない。待合室では日本オリンピック委員会、田畑総務主事の帰国歓迎の挨拶に次ぎ、式場団長の謝辞があった。一同乾杯で欧州遠征五十日間の活躍と、全員無事帰国を祝し合う。懐しの故国で飲むこの一杯のビールの味も選手団にとっては一生忘れられぬ想い出になるかもしれない。家族に会って話しする間もなく出発準備だ。バスで宿舎に向う。気の毒だが帰宅は一日おあづけである。バスはいろいろの感激を乗せて一路東京へ急ぐ。宿には心づくしの寿司とおみおつけが選手団を心から待っている。

新イソップ物語

最初遅攻で……ラストは速攻

▽…ドイツ大使館での歓迎会でのできごと。大使館では日本料理をたくさんつくって選手団をねぎらった。選手らは〃待っていました〃とばかり日本料理めがけて得意の速攻をかけた。食べること、食べること。見る見るうちにテーブルの料理が消えて行く。選手たちは満腹感を味わい、エビス顔となった。これ以上食べられないというところまで食べた。そこへ日本料理チャンピオンの天プラが登場!!これにはさすがの選手らもシマッタといわんばかりの表情。腹いっぱい食べたあとなのでどうすることもできずこの天プラをただ見ているだけ。すかさず役員のひとりが「これからもこういうことがあるからあわてるな。最初は遅攻で。ラストは速攻で……」。

▽…選手団はチェコで思いもかけぬ日本の新聞を読んだ。これは的場先生。山岡先生、協会の内山嬢の三人の思いつきである。「日本の新聞が読みたいだろう」という親心からである。日本―フランスのゲームの記録が掲載されている新聞である。高嶋監督いわく「ハンドボールの記事はどこにもない」。

（注『あとでよくみたらちゃんと記録が載っていた。日本の新聞を手にしたよろこびであわてたそうです）。

他人をねたむ悪いクセ

＝楽書帖＝　第6回

鴛尾武治

▽……欧州遠征の選手団から協会、芝浦工大に届いた手紙を読んでびっくりしたことは、日程がつまり過ぎてゆっくり休養する時間がなかったとか。ゲームはナイターの連続、日本のプロ野球なみ。選手団もさぞ驚いたことだろう。ナイターも午後10時のときもあったとか。これもよい勉強になったことと思う。レセプション、試合、旅行時間などの連続で疲れたのだが、若さとファイトで消し飛ばしたときいてホッとした。世界選手権大会の前にフランスで4試合やって3勝1敗、この成績をきいて留守部隊は実のところ〝安心〟した。的場先生もこの朗報に思わずニッコリしたほどである。

▽……世界選手権大会で2敗したが「別に悲観していない」と高嶋監督の便りにホッとひと安心。これは負け惜しみではなさそうだ。（すべて善意に解釈して……）。バレーボールや、卓球が世界選手権大会で花々しい戦績をあげ、ハンドボールは完敗。しかし決して肩身が狭いとは思わない。スポーツの世界はそんなものじゃない。負けても気にすることはない。こんどの遠征でヨーロッパのハンドボールを身につけてきた。これだけでも大きな前進である。二十人の選手団が元気いっぱいで羽田に着いたときは、人ごとながら肩の重荷がおりた。暗いカゲが少しもみられなかった。それでいいのだ。

▽……こんどの遠征選手団の選考について大部異論が出た。芝浦工大系が多いのがその理由らしい。日本人はすぐねたむ。悪いクセである。人のやったことにケチをつけたがるのは、このさい改めてもらいたい。別に高嶋氏の肩を持つわけではないが、いまのハンドボール協会で実力者がいったいなん人いるだろうか。初の遠征にまでこぎつけたのは高嶋氏の努力である。異論をいったり、ケチをつけるような人は、このさい遠慮なく理事長のイスにすわってひとつ大いにやってもらいたいものだ。わたしと高嶋氏とは二十年来の交友だが、野心を持っている人ぢゃない。現に在京の常務理事とか、そのほか役職についている人のなかにはこんどの遠征について全然顔を出さない人もいる。合宿にも来ないし、激励にも来ない。こんなことでハンドボールがすこやかに前進するだろうか。こんなことをやっているから他のスポーツ団体から変な目でみられるのだ。役職についている人は力を合わせてハンドボールの伸展をのぞむのがほんとうなのだ。それなのに遠征チームからはずされたといって文句をつけるのでは筋が通らない。このさい大いに反省してもらいたい。

（共同通信社運動部）

時評

全日本室内の発展的解消を

全日本学生の実現を優先せよ

聞くところによると来年一月に待望の全日本学生室内選手権大会が大阪で開かれるそうである。結構な話である。いまから大いに楽しみにしている。いままでさえ短期間を嘆いていたインドアシーズンに、またこうした大きな大会が一つ増えると云うことはいろいろな問題を生みそうである。

これまで行なわれてきた全日本総合室内選手権は、ほとんど一月に開かれている。例外は第一、三回大会の十二月と第二回大会の三月だけである。つまり第四回以後はずっと一月で、その一月に二つの〝全日本〟が行なわれるという。学生チームはおそらく、全日本総合の方には、ほとんど姿を見せなくなってしまうかもしれない。

過去の大会でも学生チームは試験期を直後にひかえているため、この大会にはあまり積極的な参加を好まない。第一回6　第二回9　第三回7　第四回6　第五回6　第六回6　第七回15というのがその具体的な数字である。この数字にはオール××大と云うものも含めているから、純粋な現役単独の学生チームは半数以下である。しかもいつも出ている日体大、芝浦工大を除けば本当に僅かなチームしか参加していない。

全日本学生室内の開催はますますこの傾向に拍車をかけるだろう。この辺の調整を考えないと、全日本総合室内選手権の内容は低いものになってしまう。

そこで考えられるのは全日本総合室内選手権の発展的解消である。換言すれば全日本学生室内選手権の優先である。つまり、過去に七回を数えたこの大会を解消して、その代り全日本室内と全日本社会人室内の二大会を新設するのである。

前者については特に説明は要らないだろう。後者はクラブ、自衛隊、実業団などの大会で、学生単一のチーム以外ならどんなチームでもよいという資格のもとに行なうのである。現にことしの第七回大会などは、東京選手権だなどといわれたほどだ。こうした方向に踏み切ってもよいのではないだろうか。

そうして近い将来、必要なら両者の優勝者同士による〝日本選手権〟を争う大会を別に企画すればよいだろう。

あくまで、全日本総合室内を残そうというならば十二月開催を実現すべきである。

×　×

寄稿特集

日本ハンドボール界に注文

オリンピック種目の夢破れ、すべてをかけたと豪語しながらも完敗に終った世界選手権。日本のハンドボール界はいま重大な機に立たされています。この機にあたって各方面からこれまでの日本のハンドボール界の歩んできた道、たどってきた道を振り返っていただき、あすの成長の一石となるよう、この特集を組みました。読者諸兄姉の反響を期待します。

11人制全廃、7人制に

福岡県協会理事長　小袋是郎

福岡県ハンドボール協会の最大行事である第四回近県室内総合選手権大会は無事終了したが、主催者のひとりとして、私の考えを述べてみたいと思う。

非力な地方協会が（金もなく名もなく、日本協会の役員にきていただく金はさらにない）大会を運営して早や四回をかぞえた。回をかさねるたびに参加チーム数の増加（ことしから十八チーム）、出場チームの内容充実をはかっているのは一体なんであろうか。実のところ私たちは、この大会を開催するにあたり、大変不安を感じていた（福岡県だけの大会に終りはしないかと）。はたして近県から出場チームがどのくらい集まるか。全く見当がつかなかった。なにはともあれ、大会要綱を作製し（ガリズリ）九州各県ならびに山口県協会へ配布した。

準備としては荒木先生に石橋文化センターへ会場などの交渉にご足労ねがい、OKはとったものの参加チーム数が心配となった。熊本の北川先生から力強いご援助の報らせをうけ勇気百倍。さっそくオートバイを飛ばして山口県大会（十一人制の新人戦、山口ではまだ七人制は実施していなかった）が開かれている宇部市に行き、山口県ハンドボール協会の人たちにお願いして参加の確報を受けとった。中西君とともに長崎市、佐世保市へ七人制の講習会に出かけた。そこで佐世保クラブの出場を決め、どうにかやっと四回目にして基礎が固まり、今後が大変楽しみになってきた。この間参加された選手や代表の人たちと話し合って感じたことは、経費の問題、選手養成の問題、グラウンドの問題など大きな壁があることがわかった。以上のような問題点を投げ出されてみるとすべてがもっともなことである。

本部協会や高体連本部などで大会役員として指導にきた人たちは、経費（出場費）やグラウンドの問題（野球、サッカー、ラグビーなど）はあまり関心がおありでないと思うが、地方ではこれらがいちばん大きな問題点となることはわたしひとりの考えではないと思う。チームにしても全日本総合に出場したい希望は強い。しかしこの希望も遠征費、チーム編成などで壁にぶちあたり立ち消えになってしまう。それに対し近県の場合は経費もたいしてかからず、大会名に圧倒されることなく、楽しく参加しているといわれる人たちが非常に多い。他のスポーツ団体では全日本の出場希望チームが星の数ほどあるのに予選制度のため出場できない。ハンドボールはフリー参加でありながら地方からの参加がない。この矛盾はどこにあるのだろうか。深く考えてみたい。なんといっても普及度の問題であろう。かってバレーボールが百万人のバレーと普及宣伝していたときは、当地方では本部協会から派遣された理事の人たちが大抵普及講習会に出席していた。ハンドボールは旅費を地方で負担しない限り、本部役員の熱意ある講習会は開かれたことがない。ハンドボール発展のため本部役員の絶大なる努力を期待したい。前向きにあるべきハンドボールは他のスポーツ同様に、全国津々浦々に実業団チームの誕生がない限りその発展は望めないのではないだろうか。大会社（本社）が集中している東京で実業団チームが一体なんチームあるのか私は知らない（大崎電気一チームは知っている）。広島県では全日本実業団大会に六チームが参加しているではないか。福岡には自衛隊幹侯学校、岡野バルブ（誕生）、八幡製鉄（同好会）などとぼつぼつ普及している。

本部協会役員の人たちよ。なぜ各種の大会社に一粒の青い麦をまかないのか。それにはいろいろの理由があることは十分知っている。しかしそれではあまりにも勇気がなさすぎはしませんか。ハンドボール競技は東京オリンピックを境として取り残されはしまいかと私は心配しています。世界選手権に参加も必要であろうが、それ以前のこともやろうではありませんか。

普及、経費、選手養成、グラウンドの問題など一挙に解決するために、社会人チームを（もちろんスクールチームも）多くすることだと思います。それには男女の別なくすべて七人制に切り替えたらどんなものでしょう。私は過去の人間です。広々としたグラウンドで青空の下、のびのびとやる十一人制ハンドボールには人一倍愛着と郷愁を強く感じています。一地方にいて普及発展にいささかたずさわること十数年、とくにここ二三年の間に痛感したことはすべての点で十一人制より七人制の方がやりやすいことです。またそういう意見を持っている人たちが多いのです。世界情勢、日本の現状などでむづかしいことは多々あると

思います。しかし日本のハンドボール競技をよりいっそう普及発展させるために、このさい十一人制を全廃し、七人制にすることを全国のハンドボール愛好者に提案します。本部役員、全国の先輩各位のご批判をお願い致します。（福岡県ハンドボール協会理事長）

権威ある室内選手権を

北海道協会理事長 万代秀三郎

協会創立後二十有余年逐に宿望の海外遠征までに大発展したハンドボール界の隆盛に快哉を叫ぶと同時に心から祝意を表する。今後とも根強い普及を基盤にたゆまざる精進と関係者各位の努力によってますます隆昌の一途をたどるよう祈る次第です。そこで本論に入るわけですが関係者が関係協会を叱るんだから若干心苦しい気もするが飽くまで母親が愛児を叱る愛の鞭であると解して大いに叱って見たい。

一、オリンピック戦になぜ落ちた。過去十七回のオリンピックにハンドボールが取り上げられたのは一九三六年のベルリン大会だけで記録には六ヵ国、一〇六名の参加であったとなっている、昨年のローマ大会にはドイツ、スイス、オーストリヤなど近隣がハンドボールの世界的な中心地だけにその開催を予想していたが逐に姿を見せなかった。I・H・Fはなにをしている。それこそほんとうに叱りたかった。勿論ローマ自体に意慾がなかったと云へばそれまでの事だろうが。東京大会には最初とりあげられていたが糠喜びに終った。I・O・Cの詳細についてはつまびらかでないがアジヤ地区に普及されていない、予算上の問題だ、政治的に圧力があったなどときく度に之に対する協会自体にこの工作に、PRに政治的な接渉に積極的な努力が足りなかったのではないかと疑いたくもなる、然し過ぎた事はあまり言いたくないがこの結果を充分に検討反省し今後のアジア大会や、ユースサッカー的な高校の大会、その他の国際競技への大飛躍を希望する。

二、中学の必須種目からなぜ消えた。体育の新らしい中学校指導要領にハンドボールが突如として消えてしまった。あらゆる角度から考えて指導面に一番大事なこの時期にどんな理由で除外されたのか。前の要領には立派に必修種目としてとり上げられていた筈だ、たとえそれが試案の程度のものかも知らないが必修種目から、やってもいい教材として格下げになった扱い方に当局に厳重抗議したいと同時に協会自体の之に対する意見と対策をお聞きしたい、やるなといっていないんだからいいじゃないかでは承服出来ない、確認ではないが高校の場合も取り上げ方に非点があったときいている。体力的に年令的に最も普及指導していかなければならない大切な時だと思う。至急善処されんことを要望する。

三、室内ハンドボール選手権について

スピードと高度の技術が要求されるこの競技はバスケットボールと同様見ていても快適な陶酔とスリルを感ずる誠にスピーデーなゲームだ。普及度の点から未だ過渡期にあるとはいえ少なくとも日本選手権である以上もう少し権威をもった大会であってほしい。という事はその辺から集めてチームを作れば簡単に出場出来るような大会であってはいけないと思う。参加数が問題だとは思うがインターハイのように厳重な地方予選の壁を突破して晴れの大会に出場するか地方支部の責任ある推薦による出場か、他種目に見られない内外両面を使いわけできる。しかも年中行われる球技だけに誇り高い大会に育成して欲しい。

四、地方強化を積極的に

どの種目でも同じ事が云えるが底辺の広さは伸びるための最大の条件である。勿論経費の点も考へねばならないだろうが未だ普及されない未組織地域の開発と強化のための地方講習会や審判講習会など年間を通じて協会自体巡回指導など考えてはどうでしょう。勿論支部自体も地方の普及開発に努力すべきだが常に新らしい進歩した技術やルールの吸収は本部が最も敏感であり指導方法も熟達しているので支部だけに委かせずもっと積極的に地方強化のためその進出を要望したい。

大柄な選手養成が必要

共同通信社運動部記者 鴛尾武治

▽…フランスのスポーツ紙「レキップ」が最近伝えたところによると、「ヨーロッパでは十一人制を全廃して七人制に切り替えた国がある」と報じている。これはスピードの要求と、冬季間でもプレーできるというのが理由。すべてのスポーツはスピードを要求している。スピードのないスポーツは伸びない。その意味から十一人制はスピードに欠け、七人制はスピードに富んでいる。わたしは七人制のあのスピードに魅力を感じ、これからのハンドボールは七人制でやるべきだと痛感した。スピードばかりではない。選手が比較的集めやすいこと、インドアでもできること、選手の動きがよくわかること、観客が集まりやすいという理由もある。わたしはときどき協会の人たちに「七人制にすべきだ」と苦言を呈している。バスケットボールは年がたつにつれてスピードを要求し、機会あるごとにルールを改正してスピード・アップに苦心している。七人制を全面的に切り替えることができなければ、現在の十一人制のルールを改正してスピード化につとめてもらいたい。ことし一月の全日本室内選手権や、欧州遠征チームの壮行試合をみた人たちは「十一人制よりスピードがあっておもしろかった」と口をそろえていた。また初めてハンドボールをみたジャーナリストもインドアのスピードをみ

「バスケットボールよりもスリルがあっておもしろい」といっていた。

▽…日本チームが遠征中、外国通信社（AP、UPI、ロイターなど）は「外国選手は非常に大きい。日本のいちばん大きい選手が外国選手のいちばん小さい選手と同じ……」と伝えている。これが不幸にして適中した。選手からの手紙をみても外国選手の大きいのに驚いている。日本は竹野、高村、深江の三人が大きい方である。バックスの田口、村上、服部、FWの井上は小さい。ずい分苦労したことと思う。こんどの遠征で大きな選手の必要性がわかったが。日本のスポーツ界の現状としては大きな選手を求めるのはむずかしい。ちょっと大きいと思えばすぐバスケットボールに行ってしまう。だからといってただ指をくわえてみていては芸がない。これからのハンドボールも1メートル80センチ以上の選手が絶対必要である。関係者はできる限り大きな選手の発掘に努力してもらいたい。「ハンドボールには身長差はない」といっていたが。どうやらこれは事実となってしまった。こんどの海外遠征を機に「大きな選手の養成」に心がけてもらいたい。

安直な考えをすてよう

NHK運動部記者　杉山　茂

小さなワクのなかで、なにかゴソゴソやってる……。そんな感じをいつも日本のハンドボール界からは受けます。

大会にしたって、試合にしたって、グラウンドに二つのチームがやってきて試合をやりさえすればよいといった安直な考えが見られます。だから、頭数だけそろえば大会の権威が充実したように考えたりする。観客の動員が必要になるとすぐ〝学校〟を動かす。たしかにそれでよい時期もありました。間違っていることだというのではありません。

ただ、なにかそのとき、そのときを埋めさえすればよいといった安直さがある。この世界のソコココに流れているのではないだろうか、ということです。

ハンドボールはようやく世間の人にわかってもらえるスポーツになってきました。しかし、それでもなお、ラグビー、バスケットボール、バレーボール、サッカーなど他のボールゲームとは比べものにならないほど、その一般的関心度、普及度は低位です。それは、やはり一貫したPR方針や選手強化方針、計画的な国際交流をはじめとする事業方針に欠け、しかも挙国的な行動が少ないからだと思います。

これから伸びようとするこの機に、一部の主観的満足感だけでいっさいを運ぶのは危険です。もちろん千差万別の意見を調整するには、主観的な一線が必要になって来ます。それは最大公約数に近い一線であるべきでしょう。その点これまでのハンドボール界はいささか不備だったようです。

協会の方針に全国が文句なくバックアップすることがハンドボール界を充実させ、伸展させる最良そして無二の道です。

東京の本部協会は地方協会、在野のプレーヤースと積極的に交流すべきです。その上で本部協会はしっかりした方針を明示して、全国の競技者をその一点に結束、集中させる方法をとるべきです。ある者は右を向き、ある者は左を向いているような現状は、自滅の道を歩んでいるといっても過言ではありません。

多くの競技人口を有しながらハンドボール界自体は、まだまだ大変な子供ですし、一日も早く大人になってほしいものです。

競技としてのハンドボールは、ようやく日本にしっかりした根をおろしたようです。今後の問題は、大衆の中にハンドボールというスポーツを、どう普及させどう関心を集中させるかです。それには、協会自体がグラグラしていてはなにもできないハズです。（NHK名古屋）

関東学生春季二部リーグ

▽5月14日	学—千	防—千工	順—茨	東—武
▽5月20日	慶—千	学—武	東—千工	防—茨
▽5月21日	慶—千工	順—東	学—茨	武—千
▽5月27日	順—千工	慶—武	茨—千	防—東
▽5月28日	茨—千工	防—順	東—千	慶—学
▽5月3日	学—東	順—武	慶—茨	防—千
▽6月4日	慶—防	武—千工	東—茨	順—学
▽6月10日	学—千工	慶—東	順—千	防—武
▽6月11日	千—千工	茨—武	防—学	慶—順

東西学生春季リーグ日程表

関西（一部）

5月3日（祝）	同—府	学—立	関—京	神—甲
5月5日（祝）	学—府	同—立	関—甲	神—京
5月13日（土）	関—立	同—甲	府—神	学—京
5月20日（土）	学—甲	神—立	同—京	関—府
5月21日（日）	甲—立	京—府	神—学	同—関
5月27日（土）	京—立	府—甲	神—同	学—関
5月28日（日）	甲—京	府—立	神—関	同—学

※学＝関学　（いずれも西宮第一球技場）

関東（一部）

5月14日（日）	芝—立	日—教	中—明	早—法
5月20日（土）	日—立	早—明	中—法	芝—教
5月21日（日）	中—教	日—法	芝—明	早—立
5月27日（土）	芝—法	中—立	日—明	早—教
5月28日（日）	芝—早	日—中	法—教	明—立
6月4日（日）	日—早	中—芝	明—教	法—立
6月11日（日）	教—立	法—明	中—早	芝—日

※芝＝芝工大　日＝日体大　（いずれも駒沢グラウンド）

今月の話題

明年、日ソ国際試合実現か

＝急速に伸びたソ連のハンドボール＝

待望の日本―ソビエト国際試合が来シーズン（一九六二年）実現するという明るいニュース。

東京オリンピック選手強化対策本部はかねてから日ソスポーツ交流計画を進めていたが、このほど全ソビエト連邦スポーツ団体組織委員会（ＮＯＣ）からハンドボールをふくめ陸上、バレーボール、サッカー、水泳などその具体的な交流計画案が同本部に寄せられた。



世界選手権予選ソ連対ルーマニアの試合から（ＴＳＮ提供）

それによるとハンドボールは一九六二年（昭和三十七年）、日本チームがソビエトに遠征することになっている。もしこの計画が順調に進めば、日本スポーツ界の念願だった日ソ交流計画が軌道に乗ることになり大いにその成果が期待されている。

ことに日本ハンドボール界にとっては今春のヨーロッパ遠征に次いで二度目の海外遠征である。最近ようやくハンドボールに対する一般的な関心が高まって来たときでもあり、願ってもないチャンスである。

問題は東京オリンピック選手強化対策本部が、ソビエトにその交流計画を折衝し始めた時期が例のオリンピック種目の削減以前である。この点いささか不安がないわけではない。オリンピック東京大会ということにこだわらず、日ソスポーツ界の全面的な交流ということになれば、この国際試合（遠征）の実現の可能性は八分通りあるといってよい。ハンドボール界にとってもぜひそうであってほしいところだ。

ところでソ連のハンドボール界の実情だが、その生い立ちは、日本のハンドボール界に共通した面が多く興味深い。その第一は比較的その移入が早かったにもかかわらず、スポーツとしてハンドボールが行なわれるようになったのは極く最近であること。第二には、その主流がこれまでは学生であって、最近ようやく一般の間にも普及されたことなどがそれである。

まず第一の点だがソ連にハンドボールが伝えられたのは一九二五年ごろである。ドイツで世界で最初にハンドボールの大会が行なわれたのが一九二一年だから、その移入はかなり早かったことになる。

しかしそのころのソ連のハンドボールは競技の形を整えていなかった。スポーツの球技よりもレクリェーションの球戯であった。

ソ連で最初にハンドボールの試合が行なわれたのは一九三〇年、その中心となっていたのは学生チームであった。

しかし一般の関心がうすくそのために大きく成長するまでに至らなかった。いつの間にか姿さえ消えてしまった。

一九四〇年代に入って、再び学生の間で復活され、しっかりした根を下ろして対抗試合などが組織的に行なわれるようになった。

その結果一九五〇年代にはいってようやくソ連スポーツ界でもこの競技に注目した。初めは体育としてとり入れられ、続いてスポーツとしての普及に変ってきた。

一九五八年に初めて「全ソ連選手権」が開かれ、本格的なスタートを切った。

このようなわけでソ連のハンドボール界の歴史は、われわれが想像しているよりもはるかに歴史が浅い。その普及度も未だに全国的とまではいっていない。一九五八年いらいわずか三年余しか経ていないにもかかわらず、国際試合の開催や、優秀コーチの育成などで相当の実力を備えてきた。これはソ連の積極的なスポーツ行政と振興策によるものである。その一つの例としてことしの一月には第四回世界室内選手権で優勝したルーマニアと東部第二地区予選で顔を合わせ、第一戦12―9、第二戦13―18の一勝一敗という成績をあげたことでもわかる。チェコともさかんに交流しているなど近い将来には世界のハンドボール界のトップチームに成長することはまず間違いあるまい。

そうした昇り坂のしかも独得のスポーツ科学や、実践方式で短期間に発展したソ連ハンドボール界と交流できることは日本ハンドボール界にとってよろこばしい。

現在ソ連では学生と軍隊がその競技人口の大半を占めている。ルーマニアとの予選に出場した代表チームはキェフ、モスコーロフォフ、ザポロデーェ各都市の代表チームから選抜されたピックアップチームであった。（Ｓ）

特別寄稿

ハンドボールの前途

久留米市石橋文化センター体育部長　岡部平太
（医学博士）

第四回九州近県総合室内ハンドボール大会というのが当石橋文化センターのフロアで行なわれることになり、開会にあたって私に祝辞をのべてくれとの依頼があったので大要次のようなことをのべた。

▽…1918年（大正七年）私は米国に留学してすでに約一ヵ年たったころ、米国の大学スポーツの各種の競技を実際にやり終った。いろいろ故国日本の当時の状態と比較して考えることを忘れなかった。もちろん米国の大学スポーツとして最も人気のあるのはフットボール（タッチダウン）で、次は冬のシーズンのバスケットボールであった。だから私はなにをおいてもこの二つは懸命だった。フットボールはもちろん私の最も好きなスポーツだったが、これを日本に移すのは大変だった。当時日本の大学には駒場の帝大農学部に280メートル一周の陸上競技場があるだけで、私のいた東京高等師範の運動場などは付属中との共有でそのうえ、砂利のひどい運動場でサッカーがやっとできる程度で、アメリカン・フットボールを日本全国に普及することは到底無理だった。

▽…そこで私は考え込んだ。私は私のシカゴ大学のフットボールのコーチだったスタッグ先生がエール大学在学中五ヵ年間、野球リーグの全勝投手として立たれた投手板（プレート）にいちど立ってみようと考えて辺地のエールを訪問したのであった。その一週間ばかりの間、私は新しく日本で行なえるゲームの構想を練りつづけた。バスケットボールの創始者であるネイスミスはスプリングフィールド、YMCAカレッジの助手時代スタッグ先生と同僚であったという点もあって、私はサッカーとバスケットボールをコンバインド（組み合わせる）したら日本の田舎の小学校、中学校、どこでもできるおもしろいチームプレーになると思って種々考えた。そうしてそのルールを考えてつくり上げたものを、高等師範の二つばかり下のクラス級長であり、サッカーの主将だったS君に書き送った。そうして実際にやってみてくれるように依頼した。忘れもしない。そのゲームがいまこのフロアで行なわれているハンドボールと全く同じものだったのである。

▽…しかしS君に私の意図は十分伝わらなかったらしく、彼はそれに手をつけなかったようだ。もちろん彼はサッカーはやったが、バスケットを知らなかったらしい。そんなところからさらに一年後、帰国してみたとき、日本の運動場にはハンドボールのなんのあともなく、私もそれから一年もせぬうちに日本を去って満州に行った。だが私はこのゲームは自分も考えていたと思っている。その後何十年かしてドイツからハンドボールが輸入された。見物したら全く私が考えていたものそのものであった。私はやはりドイツ人も私と同じようなことを考えるものだと思った。

▽…終戦後の第三回国体を福岡でやるとき、私は準備委員長でもちろんハンドボールにも関係した。たくさんの競技種目を米国の前記スタッグ先生に知らせる手紙を書き、ハンドボールの下に「このゲームはドイツ式のもの」とカッコしてゲームのやり方などを書いた。この私信をちょうどこの国体に非常な好意をよせてくれた福岡駐在のマンスキー司令官夫妻の招宴があったので、その手紙をみせた。ところが夫妻は笑いながらこのハンドボールのカッコ内のただし書は不用だから消せという。マンスキー司令官はハンドボールの名手だという。妻君は「夫はそれの選手権保持者だ」という。私の中国滞在二十五年が長過ぎて私の方がボケたなど笑って話し合った。

文部省はなぜ中学校の指導要領からハンドボールを除外したか。

▽…この大会に集まったハンドボールのチームは20チーム以上だった。私は前述のようなわけでこのゲームには特別の興味があった。選手も役員も二日間の大会を非常な熱意で競技された。そのとき思ったのは文部省の指導要領審査委員はなぜこれを除外したかという問題である。これだけさかんになったゲームを放っておいてもまだまださかんになるのである。しかもなんの危険も起らず、弊害もなく、男女とも楽しめ他の競技よりもはるかに妥当と思われる。恐らく委員のだれもがこのゲームを理解しなかったのではないか。これは外国から輸入されたかもしれないが、前述の様に日本人の私もアメリカのスポーツをやってのち、日本人の頭で構成したスポーツだといっても決して言い過ぎでないと思う。私は実はそれを契機に新らしきスポーツの構成には意欲を失ったほど、左様に考えつめたものである。すべて自然発生的に発達した近代スポーツにはそこにやむにやまれぬ非常に大切な動機がある。

▽…必然性が深く深く根ざしていることを考えるべきではないかと思う。もしそれがなかったら決してかくの如くさかんになるものではない。むしろそれがないならば例外なく立ち枯れて行くのがスポーツの運命である。スポーツは如何に

特別寄稿

簡単にみえてもそれが出来上るのは決して容易ではない。この点文部省の役人諸君は再考していただきたい。わずか一行か二行でよい。自由な採用種目としてとりあげることによってこの競技の根は亡びないで、むしろ益々栄える。それを捨て去ることはこの競技の根を枯らすことになる。スポーツとはそんなものである。私が再び新しいスポーツ構想の意欲を失ったのはその根源の深さを知ったためであり、その深さを知れば知るほど新しいスポーツを創作するより、古いものに力を入れる方が凡庸（ぼんよう）な自分の歩く道だと考えたからである。（原文のまま）。



筆者　岡部平太氏

スポーツ界の風雲児

（岡部氏の略歴） 福岡県出身、六十九歳。オリンピック強化委員。医学博士。福岡師範—東京高師を卒業、柔道に専念し学生柔道界に君臨した。卒業後米国に留学、陸上、レスリング、ボクシング、フットボールと手当たりしだいに勉強、帰国後は一高、水戸高校の陸上をコーチして黄金時代をつくった。大正13年のパリ・オリンピックで織田幹雄（現陸上強化対策本部長）に三段とびをねらわせて初入賞、岡崎勝男（元外務大臣）に五千を走らせて決勝に進ませている。そうかと思うとボクシングの要領で独特の二刀流を考え、剣道の試合で有段者をなぎ倒し無段から一気に四段の段位を与えられたスーパーマン。福岡師範の学生時代には当時横綱常陸山一行が巡業にきて福岡師範の土俵開きのとき、十両筆頭でのちに幕内力士となった宇都宮を投げ飛ばしてしまった。戦後マラソン研究に打ち込んでボストン・マラソンの監督になったり「競泳選手（水泳）の最高潮は十代だ」という事実を科学的に実証する博士論文が、四十年の研究を積み重ねて久留米大学をパスした。医学者以外のスポーツマンがスポーツ医学の研究で学位をとったのは陸上ハードルの藤田辰三、浅川正一の両氏に続いて三人目。水泳の研究では日本で初めて、日本スポーツ界の大立物。

関学が初優勝飾る

第一回西日本学生選手権開く

関西学連と西日本学連の交流として注目された第一回西日本学生選手権大会は、4月20日から四日間、豊中市の服部緑地競技場で、16校（関西14、西日本2）が参加して行なわれ、関学（関西）が初の優勝を飾った。

▽一回戦（20日）
関学15—10阪　大　関　大15—6甲南大
同大17—3山口大　京　大20—18大府大（延長）
大歯大9—6大阪学芸大　桃山学院大15—5大経大
広島商大　不戦勝　立命館大　神大　不戦勝　大工大

▽二回戦（21日）
関　学20（11—8, 6—3）11広島商大
神　大24（14—0, 10—3）3大歯大
関　大23（12—10, 11—4）14京　大
同　大18（8—3, 10—8）11桃山学院大

▽準決勝（22日）
関　学12（5—5, 7—5）10神　大

◇ほとんど昨年とメンバーの変っていない神大は、コンビネーションのよい攻守で後半20分頃まで5分の戦況で、関学を苦しめたが、関学は、終盤8—8の同点から14メートル投を吉田が決めてから余裕を見せ、辛くも神大を降した。レギュラーの大半を今春失った関学が闘志と試合ぶりで勝ちを握ったのは名門らしかった。だが今春の神大の戦力は侮れない。

関　大17（2—2, 4—1, 6—4, 5—7）14同　大

◇同大有利といわれた一戦だったが、関大は後半、風上に立つ有利を活かして優勢となり、終盤、一度は同大の反撃を許したものの、延長後は前半4—1とリードして制勝した。同大は延長前の後半14メートル投を二本落としたのが痛かった。

▽三位決定戦（23日）
神　大20（10—7, 10—9）16同　大

▽決勝（23日）
関　学14（7—7, 7—6）13関　大

◇関大の立上りは順調で、スケールの大きい攻撃と厚味のあるディフェンスを見せた。だが関学持前の闘志と試合のヤマ場を心得た運行で、CH安部が若いFWをよくリードして序盤での不利を徐々に追いあげ、前半終了時には逆に一点をリードした。後半、関大は再びリードする場面もあったが、引放そうとしてかえって焦り拙いプレーが多く、関学FWにつけ込まれ、ついに前半の一点差をはね返せぬまま敗退した。

新シーズン学生界展望 ②

関西 西日本の巻

駒沢球治郎

先号の関東、東海学生リーグの展望に続いて、西日本、関西両リーグ各校の新陣容をのぞいてみることにしよう。

関西

関東で芝浦工大が八連覇を狙えば関西でも名門関学が、昭和三十二年秋以来の首位の座を、今年も維持しようと懸命である。主将となったHB安部やGK香山FW山田ら最上級生は、入学以来、リーグ戦では優勝の味以外知らないことになる。昨年の王座決定戦で関学は連勝の芝浦工大にストップをかけ、伝統の意地を存分に示して学生王座の栄冠をかち得ているから、その自信のほどは相当のモノだ。だが、七人の一流選手を一度に卒業で失ったのは痛いし、この穴の補充は一朝一夕では埋まらないだろう。

とくにFWは、得点力がガタ落ちしており、山田を中心に藤井、小野あたりが相当覚悟を決めてやらないと苦しくなりそうである。

守備面でも試合巧者が四人も抜けてしまったのだから残った安部、村田を中心にどこまでやるか頭が痛い。

前半の下位校とのカードで調子を整えながらビッグ3の角逐にヤマを持って行くと見るのが順当だが持前の勝負強さと、名門の面子にかけてもと云う闘志を、今シーズンほど頼みにするのも関学にとっては珍しいことではあるまいか。関学の八連覇を阻むものは、やはり同大か、関大であろう。卒業の痛手は関大の方が少く、エース高村（世界選手権出場）が主将になり、闘志を燃やしているので、初優勝も夢ではない。松田、江尻を送り出したFWに一まつの不安が残るが、高村が、ヨーロッパ遠征で、確実なプレーを身につけたとしたら、突進力と恵れた体軀でシュート力が抜群だけに、驚異的な得点をあげることになろう。若い寺田、池上も順調に伸びていれば得点力では関学に劣らない。問題はGK金原、FB岩村らの守備陣で、大きな欠点はないが、意外なモロさを見せるのは、気がかりである。

同大は新主将今藤を中心としたFWが昨年と変らず、石橋、中江らも健在で、安定感はリーグ随一かも知れない。神前、中らの欠けたディフエンスは林が主軸となっての布陣だが、GK中のアナが埋まっていないと、苦しい試合を強いられる場面もありそうだ。去年も好不調の波が大きく、優勝を逸したが、春に強いと云うジンクス通りならば、宿望達成のミャクはある。

この三校に続くのは神大、京大の二校で、**京大**は、FWに、昨年の関西リーグの代表的ルーキー浅野（高津高）がおり、今年はさらに伸びているだろうし、新主将川野の攻撃力も光っている。問題は、ウイング攻撃に今一息力がなく、得点者がかたよりすぎることと、GK本田を欠いた守備陣が、HB奥田を中心にどこまでやるかであろう。

神大は卒業生が少なく上位進出の絶好のチャンスである。FWは、西本、荻林、高井、松山ら若いが基礎のシッカリしたプレーを見せているので、三強も、油断は禁物だ。守備はGK根岸主将を筆頭にして派手さはないが、まとまっている。前哨戦の西日本学生の関学戦（準決勝）で、自信をつけると、期待が持てる。

残る甲南大、府大、立命館大のうちでは、昨秋京大を食い、神大と引分けた**甲南大**が、FW弓削、小倉、川副、大高、バックスの山本、島田らを中心に虎視たんたんとしておりGK田村も着実だし、試合ぶりにムラ気さえなくなれば面白い存在になろう。

府大も名門高校出をズラリと揃えている割にパッとしないのは、工科系の選手が多く練習量に恵れないセイだろうか。GK辻本、FW薗らが中心。**立命館大**の返り咲きを願う声を聞いて久しいが、最近三シーズン続いてテールエンドだ。奮起を待ちたい。昨年秋のメンバーと変りがないので今春は自信をとり戻す、またとないチャンスと云うことが出来よう。

二部では**桃山学院大**が進出してくるのではなかろうか。寝屋川高を育てあげた中出盛雄氏（日体大出）をコーチとしており北垣、岩津らを中心に一部昇格への闘志満々で、注目を集めるチームである。

これに続くのが昨春優勝の**阪大**と昨秋優勝の**大市大**、**大阪学芸大**あたりだが、名門**大阪歯大**のカムバックも期待したい。**大工大**、**大経大**の二校は闘志でどこまでやるか実力的には、大差なく、二部は気力の優劣がモノを云いそうである。また今春は、二部リーグも西宮（第三球技場）を使用することになったのは朗報であり、充実を望んでやまない。

西日本

昨秋、山口大が、関学と学生王座決定戦の西日本代表資格をかけて対戦したことは、西日本諸チームに大きな刺激と喜びを与えた。今年は中四国学生連盟、九州学生連盟として発足することに機構が改革された。

中四国学連には、**山口大**、**岡山**

定期戦の集中を

関東学連委員長　須藤湘次

ことし私がぜひ行ないたい仕事の一つは『関東及び関西の各校が毎年個々に行なっている定期戦を一定の期間にまとめて行なってはどうか』ということである(例えば毎年正月に行なわれているラグビーの定期戦のような形式)。このことはこれからのハンドボールを広く世間にアピールする意味においても重要なことだと思う。東京オリンピックにハンドボールが除外された理由の一つとして、このスポーツがあまりにも世間一般の人々から離れたものであるといえる。聞くところによるとドイツでは、ハンドボールがちょうど日本のプロ野球のように一般大衆に人気があるという。したがってハンドボールというスポーツが、一般大衆に愛される要素を十二分に持っていると考える。ではなぜ日本でハンドボールがいまのような状態にあるか。これはいうまでもなくこのスポーツが日本国民全般に広く知れわたっていないことだ。日本国民に親しまれるには、日本人に適したボールの大きさなどいろいろ問題点もあろう。その前にもっとハンドボールというスポーツを国民全体に理解してもらうようPRが必要である。この意味において関東、関西の各校が遠征して対戦校だけの融和だけで満足するのではなにか寂しい感じがする。同じ期間に集まった各校が他校の試合を見学するなり、あるいは選手間個々の接触があればもっと定期戦が有意義なものとなるのではなかろうか。日本スポーツ界の中心である各大学が一定期間に大々的に定期戦を行なうならば、必ずその効果は大なるものとなって現われるだろう。

地方チームも本部と連絡を密にしまた関西、東海、東北および関東をも含めて学生ハンドボール連盟の人々はぜひ互いに横の連絡をとろうではないか。(慶大)

学生室内大会を

関西学連委員長　中江義雄

関西学連委員長として是非とも成しとげたく思っていることは、まず第一に学生の室内ハンドボール選手権大会を持ちたいことである。その第一回としてわれわれ関西学連の手で新装なった大阪中央体育館で近く盛大に行ないたいと思っている。この大会を持つことは、それにより関西スポーツファンに室内ハンドボールの持つ独特のおもしろさを知ってもらうことである。ひいては待ちにまった関西における実業団チームの誕生につながるものと強く信じている。第二に関東、東海学生界の充実に対抗して西日本学生界の充実、発展を計かろうと思っている。これは四月二十日からの西日本学生選手権を開催することにより、少しでも充実するものと信じ現在強力にその準備を進めています。それで昨年関学の手によって得られた「王座」をことしも関西の手で守り抜き、他のあらゆる大会のペナントを関西学連の大学の手で握ろうと思っている。それには関学、同志社、関大の上位三校で争われているものを、関西学連全一五校がいずれも実力接近し、一五校全部が栄光をめざしがんばってもらうよう強く要望する。

ハンドボール界に望むことは全国の全ハンドボール組織を通じて、ハンドボール発展のために世間一般の人々にPRしてもらいたいことです。それには協会の諸先輩が一致団結して、ハンドボール普及に協力くだされることをお願いします。それに全日本室内に関西の大学が気持ちよく安心して参加できるような日程を組んでいただきたい。最後に全日本的大会に於て各地区の予選を行い参加チームの充実を計られたら如何でしょうか? これは私個人的な意見かもしれませんが……。

(同志社大)

大、広島商大、松山商大、愛媛大などが加り、九州連盟には**西南学院大、熊本商大、鹿児島大**などの参加が予定されている。

実力的には、昨秋の山口大対関学(3—23)昨夏の全日本学生、山口大対立大(6—16)でも判る通り、未だしの感はまぬがれないが、各校とも、日本のトップゾーンに在るのだから周囲のクラブチームに強豪が多く、この点を生かせば、大いに希望が持てる。代表格の山口大は、バックスの山根、岡、FWの津田(米)、松原らを主力に今年こそ、中央勢に対抗出来るまで、戦力を引き上げたいと闘志を見せておりその健闘を注目したい。

活動を軌道にのせよ!

女子

男子は年々隆盛の一途をたどっているが、女子学生界の昨今は、鳴かず飛ばずだ。今シーズンから、ぜひ女子学生界の活躍が軌道にのるよう関係者の努力を促したい。

男子は11人制、7人制を併用しているが、女子が7人制に一本化している点で協調性がないのも、マイナスになっている。来春には7人制の全日本学生が開かれるそうだから、現在ある**日体大、日女体短大、熊本商大**などが発起校で女子学生チームの結成を呼びかけたらどうだろう。参加チームが五指に満たなくても、第一回全日本学生室内は女子部門も是非開いてもらいたいものである。

地方だより

福岡クラブが優勝
=西日本一般男子選手権=

西日本一般（男子）選手権大会は4月1、2の両日、広島県呉市の旧練兵場グラウンドで関西、中国、九州地区の十チームが（内棄権一）参加して行なわれた。この結果福岡クラブが神戸ストークを破って優勝した。

この大会には広島県下の実業団四チームが参加したが、いずれも攻守に未だしの感をまぬがれなかった。

▽一回戦
京都クラブ　11—10　三菱レーヨン大竹

▽二回戦
神戸ストーク　21—6　日新製鋼呉
福岡クラブ　21—7　淀川製鋼呉
呉造船　不戦勝　熊本クラブ
京都クラブ　12—9　山口クラブ

▽準決勝
神戸ストーク　24（13—3、11—1）4　呉造船
福岡ク　16（9—4、7—6）10　京都ク

▽決勝
福岡ク　13（10—2、3—9）11　神戸ストーク

中京商、一般を制す
=愛知県室内選手権大会=

愛知県室内選手権大会（男子）は2月5、12の両日、名古屋市松蔭高コートで高校、実業団、クラブチームなど17チームが参加して行なわれた。決勝は桜丘会のメンバーを中心とした桜丘クラブを破った中京商と、浅野（日体出）、宮地（関学出）らベテランでかためた一宮クラブとの間で争われ中京商が堂々と優勝した。

▽準々決勝
一宮ク　11—5　名工大
中京大　19—3　新三菱重工
中京商　14—4　愛商ク
桜丘ク　不戦勝　上野町ク

▽準決勝
一宮ク　13（5—6、8—6）12　中京大
中京商　11（6—5、5—3）8　桜丘ク

▽決勝
中京商　12（6—4、6—7）11　一宮ク

関学を表彰

関西運動記者クラブ（KSWC）は恒例の関西スポーツ賞受賞者の選考を行なっていたが、昭和三十五年度のハンドボール界最優秀団体として関西学院大学ハンドボール部を表彰した。

関学は関西学生リーグで春秋優勝（七連勝）、通算二十四回の優勝を遂げたほか、全日本学生王座を獲得、全日本学生では三位になった。ことに王座戦で47連勝の芝工大を破った一戦は記憶に新しい。

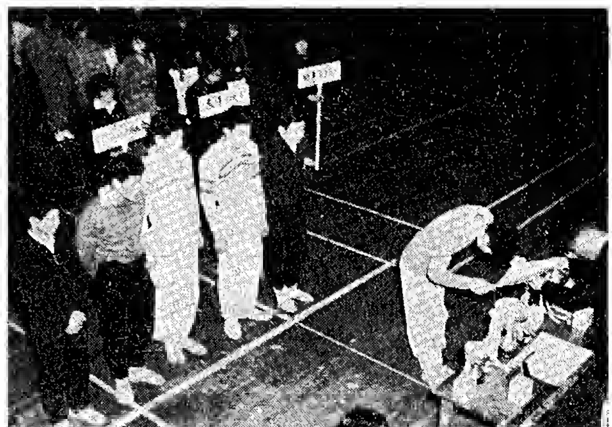
九月九日に早慶ナイター

第九回早慶ハンドボール定期戦は九月九日国立競技場でナイターとして行なわれることになった。この定期戦がナイターで行なわれるのは四度目。

小倉工業が優勝
太洋デパートも初陣飾る
=九州近県室内総合選手権大会=

第四回九州近県室内総合ハンドボール選手権大会は3月25日、26日の二日間久留米市石橋文化センター体育館で行なわれた。（男子16チーム、女子10チーム）。男子は小倉工業OBが二度目の優勝、女子はことし一月の全日本室内で優勝した熊本商大クラブの全員入社によって誕生した熊本太洋デパートが予想通りの実力を発揮してワンサイドで優勝した。大会の印象を大まかにいえば男子チームの実力が非常に接近し、近年にない充実したおもしろいゲームであった。女子は前回までは熊本勢に対して堂々と戦いをいどんでいた福岡勢が、実業団チーム太洋デパートの出現によりなんらなすすべもなく敗れ去ったことである。

山口、長崎、熊本、福岡各県が出場し、地方大会としては技術的、内容的にも充実していた。地方ハンドボールの普及発展に重要な役割を果す教職員チームが多く、とくに佐世保クラブはハンドボールを学生時代に全然やったことのない教員のチームである。熊城会は名門熊本市立商業の卒業生で編成されたチーム、かって来日したドイツチームのケンパ氏のように、高校監督の津田先生が教え子の沢田、島崎、緒方などを指揮して自らも名FWとして大活躍し、自衛隊幹候学校、西南学院大学を連破した。



賞状を受ける小倉工業OBの三浦選手

こんご楽しめるチームは宗像クラブである。努力次第では優勝できるチーム、素質のあるプレーヤーが多い。女子実業団チームの熊本太洋デパートはすばらしい速攻、ゴール前のローリング、みごとなつめ、全員の強力なシュート力、全員のスピーディなゲーム展開などバラエティに富んでいた。他チームにとって非常に強い刺激となった。小柄ながらきびきびしたゲームをみせた明善高が印象に残った。

最後に本大会をあたたかくご援助くださった石橋文化センター青木常務、岡部体育部長ならびに関係者に厚く感謝の意を表します。

（大会委員長小袋是郎）

「男子」
▽一回戦
福岡愛球会（福岡）　不戦勝　自衛隊健軍（熊本）
山口クラブ（山口）　12—9　熊本商大（熊本）
西南学院大（福岡）　17—11　山口大（山口）

熊城会（熊本） 19－10 自衛隊幹候生学校（福岡）

熊本教職員（熊本） 8－6 香椎クラブ（福岡）

宗像クラブ（福岡） 20－5 佐世保クラブ（長崎）

博送クラブ（福岡） 19－16 熊本商大付高クラブ（熊本）

小倉工業OB（福岡） 11－9 熊本市商クラブ（熊本）

▽準々決勝

福岡愛球会 18－12 山口クラブ

熊城会 19－12 西南学院大

宗像クラブ 10－7 熊本教職員

小倉工業OB 28－6 博送クラブ

▽準決勝

福岡愛球会 9－7 熊城会

小倉工業OB 11－9 宗像クラブ

▽決勝

小倉工業OB 8（3－2、3－4、0－0、0－0、1－0、1－0）6 福岡愛球会

「女子」

▽一回戦

南筑クラブ（福岡） 8－5 信愛高クラブ（熊本）

筑紫中央高クラブ（福岡） 11－2 久留米クラブ（福岡）

▽準々決勝

太洋デパート（熊本） 16－2 南筑クラブ

明善クラブ（福岡） 11－3 尚絅高クラブ（熊本）

菊池農蚕高クラブ（熊本） 8－7 明善高クラブ（福岡）

熊本市高クラブ（熊本） 14－3 筑紫中央高クラブ

▽準決勝

太洋デパート 21－2 明善クラブ

菊池農蚕高クラブ 8－5 熊本市高クラブ

▽決勝

太洋デパート 21（8－3、13－3）6 菊池農蚕高クラブ

加納高（男子）が優勝

岐阜県春季高校選手権

岐阜県高校春季選手権は4月23日、男子7、女子6チームを集めて岐阜商高グランドで行なわれたが、男子は加納高、女子は大垣南高がそれぞれ優勝した。

▽男子準決勝

加納高 11（5－4、6－5）9 岐山高

岐阜商 8（6－3、2－3）6 大垣南高

▽決勝

加納高 10（5－4、5－5）9 岐阜商

▽女子準決勝

大垣南高 11（3－3、8－3）6 鶯谷高

話題のチーム⑥

慶応・W・シューターズの巻

○…正式には慶応ウェスターンシューターズという。どこかのジャズバンドのような名前だが、レッキとしたハンドボールチーム。慶大といえば日本最初のハンドボールチームであり、日体、早大、教大などとともに名門である。

○……その慶大OBの静岡以西のメンバーでつくっているのがこのチーム。西日本慶応OBとでも名付ければわかりのよいものを、いかにも慶応ボーイの集まりらしい名前にしたもンだ。

そういえば、結成にあたってデザインしたユニフォームは、モダーンすぎて(?)、運動具屋に「責任を持てません」と断わられたそうな。

○……メンバーはいまから七、八年前、関東学生リーグで活躍した増田、稲森、竹田らを大将格に、俊足で鳴らした清水(一)や、現在新三菱重工の監督をしている岡田。試合のたびに「若けえの走れよ」といわれるその若けえのも、卒業してから三年たった野路、杉山、松本、田沢といった連中などである。いかにこのチームがハンドボールの虫の集まりだかおわかりだろう。

もっとも慶大の現役部員の関西出身者を〃準会員〃にしてメンバーの補充を計り、今シーズンも昨年現役で活躍した静岡出身の大塚児、高久保、神戸出身の牧村らが加わるという。

○……世話役の田沢氏は「試合だというと各地からメンバーが集まってきて、ただそれだけでうれしくなる。だから肝心の勝負の方はドライに割り切ってしまっている。しかしファイトだけはどんなチームにも負けないつもり。ことしはなにかひとつぐらいタイトルをとる心意気だ」という。恐しいチームである。

○……ともあれメンバーが大阪、静岡、名古屋、東京と散らばっている。それでいてチームの運営に支障がないという〃好きでなきゃできない〃見本のようなチーム。いかにレジャーブームとは申せ、よくぞ生れたものである。

加納高 6（4－1、2－2）3 岐山高

▽決勝

大垣南高 4（3－0、1－0）0 加納高

広島は修道と山陽女

広島県高校選手権は4月23日、三原高校グランドで行なわれ、男子は修道高、女子は、山陽女子高がそれぞれ優勝した。

▽男子準決勝

修道高 8－5 盈進商

広高 10－6 宮原高

▽同決勝

修道高 8（4－2、4－2）4 広高

▽女子準決勝

山陽女高 4－2 呉三津田高

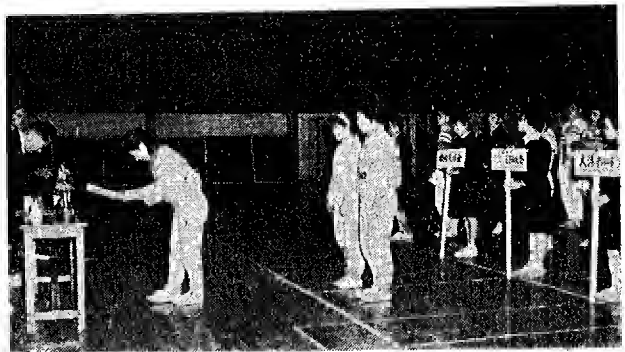
進徳高 11－0 三原東高

▽同決勝

山陽女高 6（4－2、2－1）3 進徳高

一人一冊

機関誌を伸ばすためにご協力ください。ハンドボールファンの方に連絡して読者をふやして欲しいのです。今年中に八号まで出る予定です。一年分二百円、送料三十二円。直接協会あてに



熊本太洋デパートが さっそうのおめみえ

熊本市に女子実業団チームが生れた。その名は「熊本太洋デパート」。ことしの大会からおめみえする。すでに福岡近県室内ハンドボール大会で初出場（?）で初優勝した強豪チーム。というと驚くけれどメンバーをみると「なーんだ」ということになる。ことし一月の全日本室内選手権で優勝した熊本商大クラブの連中がそっくりそのまま入社したのである。関、井手、今池のベテラン（ごめんなさい）、これに熊本市立高校のポイントゲッターだった西村八千代、名GKの西村美代子、久連松美和子、それに徳永智子の肥後美人ぞろい。これなら優勝も当たり前。愛知紡績もゆだんはできない。東京にはレナウンがチームを結成し、芝浦工大を卒業した塩川君が監督一年生となってすでに練習にはいっている。うわさによると日魯漁業（栃木県足利市）でもチームをつくるとか。そうなれば愛知紡績、太洋デパート、レナウン、日魯漁業、大崎電気の5チームとなり、ことしの実業団はにぎやかになりそうだ。

〔写真は賞状をうける太洋デパートの関選手〕

福島好間中チームに高校生も顔まけ

福島県の太平洋岸にはハンドボールのチームがなかった。そこで福島県石城郡好間村の好間中学校では三年前にクラブ活動の一環としてハンドボールチームを結成した。それからというものは施設の完備、練習試合を重ね、昨年十一月郡山市で第一回福島県中学大会で名門の郡山二中を13—0で破って初優勝した。ことし二月郡山市で行なわれた第四回福島県室内大会でも女子が活躍し、決勝戦で昨年優勝の福島女高と対戦、延長のすえ7—6で惜しくも優勝を逸した。

▽決　勝

福島女高		好間中
7	0—0	6
	2—2	
	2—2	
	2—2	
	1—0	

2月10日付の福島民友新聞には「高校生のお姉さまもビックリ。好間中みごと準優勝」と好間中の活躍をほめていた。中学生のクラブ活動としてハンドボールをとりあげた例はほとんどない。毎週土曜日には三時間の練習時間を設け、田子校長先生以下全職員がハンドボールのよき指導者となって若い人たちを励ました。中学生が高校生チームを相手に堂々と戦うのは全く愉快です。地方にこのようなチームが一チームでもあることは本当に心強い。しかも先生方で菊竹クラブのチームを結成しているのにはおどろいた。



〔写真説明　白いユニフォームが先生方の菊竹クラブチーム（好間中教員団）＝福島県インドア大会から＝〕

◇福岡県協会行事予定

▽県高校選手権（5月6日小倉工）▽四県対抗・長崎、山口、熊本、福岡（6月11日佐世保市）▽全日本高校県予選（6月24日香椎高校）▽国体県予選（8月26日香椎高校）▽国体地区予選（9月3日熊本市）▽県室内選手権（2月上旬小倉市）▽近県総合室内選手権大会（3月上旬久留米市）

◇岡山県協会行事予定

▽一般男子優勝大会（5月3日岡山大学）▽県下高校優勝大会（5月6日津山高）▽中学校優勝大会（6月11日岡山附中）▽全日本高校県予選（6月17日操山高）▽国体県予選（8月26日青陵高）▽県下高校選手権兼中国予選（11月4日操山高）▽一般男子選手権兼中国予選大会（11月5日操山高）

編集部からお願い

▼読者諸兄姉から次のような寄稿を欲迎します。

▽**投書**。字数とくに制限なし。ただし建設的な意見に限る。用紙自由。

▽**質疑**。ハンドボールに関する記録、技術上、審判（ルール）上の質問、用紙ハガキ。

▽**地方大会成績**。地方におけるどんな大会でもよいですからその記録をお送りください。写真もお添えくださって結構です。

▽**研究論文**。ハンドボール技術論、ハンドボール史などの研究論文。用紙、字数制限なし。

▽**観戦記**。あなたの観戦記をお寄せください。字数六百字以内、用紙自由。

▼いずれもあて先は東京都千代田区神田駿河台、岸体育館内、日本ハンドボール協会編集部。しめ切りはとくに設けません。

投書欄

建設的な大会増加を

世界選手権で日本チームは出発前の希望が大きかったせいもあるが、われわれにはまことに期待はずれの結果に終った。

つきるところ彼我の実力差ということになる。しかし、今度の代表チームの選手選考にはなにか釈然としないものがあり、優秀選手がもれていたような感じも否めない。

しかしそうしたことをいまさら、どうのこうのというのではない。こうした問題が起るのも、ひとつには協会の大会運営方針に欠陥があるからではないか。

たとえば他の競技団体では国際試合が行なわれるとなると、比較的スムズにだれの目にも順当なメンバーが選ばれる。その点ハンドボール界は西ドイツのときも、今回の海外遠征のときも未熟な選考をしている。わたしの考えるところではこれはやはり大会の数が少ないうえ全日本というタイトルの大会でも、出場チームが常連化してしまうためだろう。だから選手の選考などになると、東京中心になってしまう。地方の優秀選手の登用のチャンスがせばめられてしまう。

ラグビー界のとっている三地域対抗大会（一般）や、サッカー界が行なっている区域別選抜対抗(高校)、アイスホッケー界がことしから始めた優秀チーム選抜選手権、こういった選抜方法もある。そうして有能選手の発掘につとめるべきではないだろうか。

ハンドボール界というところは選手選考のとき、技術よりも名声中心のキライが感じられる。これはそうした問題にタッチする協会上層部が極言すれば全国のハンドボール界の隅々までよく知らないからであり、それは建設的な大会が少いからであろう。（大阪・関心寄世男）

実業団選手権は七人制に

社会人（実業団）ハンドボールがようやく軌道に乗り始めた。昨年は念願の実業団選手権が開かれました。小生は実業団球界の充実と競技人口（チーム）増加のためにことしから十一人制をやめてぜひ七人制一本にすべきだと思います。すでに教職員大会は七人制です。盛んになったとはいえ、一つの会社で十一人のメンバーを組むことはむずかしいのです。また練習場という点でも七人制の方が利点があることははっきりしています。こうしたことからことしの大会から七人制に切り替えるべきと考えます。

そうすれば実業団チームはまだまだ増加するでしょう。選手権にもたくさんのチームが参加すると思います。協会首脳部の善処を切望してやまないものであります。（静岡・一OB）

質問欄

問　第一回全日本総合選手権大会の女子の優勝チームは書物によってマチマチです。実際の優勝チームは？（東京・村山さと子）

答　正確な優勝チームは愛知クラブでした。御参考までに同大会女子部門の成績は次のとおりです。（参加三チーム）

▽一回戦　愛知ク　4—2　大阪ク

▽決　勝

愛知ク　6（3—1、3—1）2　山梨師範クラブ

問　本誌第5号で日本代表竹野選手の国際経験が四回とありました。その試合名とそのときの得点をお知らせください。（広島県・G・T生）

答　▽西独対全日本学生（6点）▽西独対全九州（1点）▽西独対関東学生選抜（2点）＝以上昭和31年9月。▽ルーマニア対全日体大（4点）＝昭和35年6月19日

問　昨秋の関西学生（一部）リーグ第四日の成績をお知らせください。本誌第4号にこの分が脱落していました。（三重・清水生）

答　同志社大 9—4 甲南大

関　大 12—5 立命大

京　大 12—7 大府大

関　学 16—9 神　大

以上でした。なお①関学②同大③関大④神大⑤甲南大⑥京大⑦大府大⑧立命大の各順位と勝敗は4号掲載どおりです。

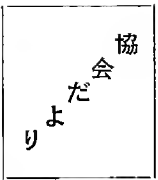
問　国際ハンドボール連盟が日本の協会に伝えたオリンピック東京大会ハンドボール種目への参加内示国が二十カ国を越しながら、IOCアンケートでは非常に少ない数の支持しか得られなかった。これはどういう理由でしょうか。（東京・近藤昇・高校生）

答　各国IOC委員によるアンケートの結果では十五種目のとき、十八種目のときのいずれのケースでも、ハンドボールはその支持順位が最下位（二十二位）でした。

御質問のような矛盾はごもっともです。これはやはり、各国IOC委員に、まだまだハンドボールが理解されていないということと、ハンドボールが世界的にみて未成熟であるという二つの点から生じたと思います。残念ながらこれらは各国ハンドボール界が世界的な実績をつくらねば解決出来ぬ問題です。なお相当の時日を要しましょう。しかしハンドボールはオリンピック憲章に定められた正式種目なのです。東京大会に採用されなかったからといって悲観するにはあたりません。

質問かんげい

ハンドボールに関することなら技術問題、記録なんでも結構です。宛先は住所、氏名(匿名可)、年令明記の上、ハガキで東京都千代田区神田駿河台、日本ハンドボール協会内機関誌編集部質疑応答係まで。



この度スポーツ振興法が議員提出により今国会に提案される運びとなり、目下関係方面で審議を重ねています。

この法案は、スポーツ振興のために国が選手強化、スポーツ施設の拡充等あらゆる面の補助育成にあたるものであって、われわれスポーツ関係者としては一日も早く国会を通過し、成立することを念願するものでありますが、今後なお幾多の困難が予想されますので、関係諸団体が相集い左記により「スポーツ振興法促進期成大会」を開催し、スポーツ界を挙げてこの熱望を披瀝し、その成立促進を国会に反映したいと思いますので、是非共貴団体より代表者三名以上の御参加をお願い申し上げます。

これはさる四月十三日各競技団体へ出された通知です。

この法案の要綱は次の通りです。

第一章　総則

1目的　2定義　3施策の方針　4計画の策定

第二章　スポーツ振興の為の措置

5スポーツの日　6国民体育大会
7運動会の開催地　8指導者の充実
9スポーツの水準の向上の為の措置
10顕彰　11青少年スポーツの振興
12職場スポーツの奨励　13屋外活動の普及奨励　14スポーツ事故の防止
15施設の整備　16学校施設の利用
17科学的研究の促進

第三章　スポーツ振興審議会及び体育指導委員

18スポーツ振興審議会
19体育指導委員

第四章　国の負担

20国の負担　21国の補助　22地方公共団体の補助

附則

1施行期日
2体育指導委員の設備に関する経過措置
3オリンピック東京大会の準備（以上）

◇36年度登録について

(1)〆切期日　昭和36年5月31日
(2)高校、大学の部は従来通りである。
(3)一般の部（男女共）
(イ)日本協会への登録料は一人一〇〇円。その納入は何れかのチーム（登録は本人の承諾をえて三チーム以内）を通じ納入すること。
(ロ)納入したものはチームの登録用紙の氏名上欄に〇印で明示すること。
(ハ)他チームを通じ登録料を納入した者の登録は本人の承諾をえ下欄のチーム名を〇で囲むこと。
(ニ)用紙に氏名を記入しても登録料を納入しない場合は登録が認められない。
(ホ)一般チームの登録は、学生生徒の身でも一般人と同じ取扱いによる。
(ヘ)〆切以後に登録出来得るものは「新設チーム」「いかなるチームにも登録されていない者」又は「登録が三重に達しない既登録者」

編集後記

▽日本スポーツ界の絶大な応援で日本チームが初めて世界選手権に参加し、各地を転戦して五十数日にして帰国した。成績のよしあしは別にしても大きな収穫があったのは事実です。これからのハンドボールも一年ごとに伸びて行くでしょう。こんどの第6号はとりあえず欧州遠征の記録を中心に編集してみました。この大半は選手団の高島監督、松本コーチ、中沢マネージャー、荒川研究員の詳細な手紙がもとになっています。両チームの個人テーブルまで送ってきたので、欧州におけるゲームが手にとるようにわかりました。写真も選手団が苦労して撮影したものです。しろうと（素人）ばかりですが、その努力を買ってください。

▽福岡の小袋兄が福岡を中心とする近県室内選手権大会の模様を連絡してくれましたので掲載しました。と同時に小袋兄が日本スポーツ界の大立物、岡部平太氏に原稿を依頼してそれを送ってきました。非常におもしろい内容というよりは、ハンドボールマンにはぜひ知ってもらいたいことばかりです。小袋兄の厚意に感謝します。

▽日ソスポーツの交流、ルーマニア、ユーゴ、チェコなどとの国際試合が話題になってきました。こんどの遠征を足場に大きく飛躍することを祈るばかり。全国ハンドボールマンの協力も必要です。この機関誌も月日がたつにつれて内容がよくなっていると思います。

▽執筆者の杉山君（NHK名古屋放送局）、編集を担当している佐内君の熱意には頭が下がります。第7号はさらによいものにしたいと思います。（ふぐ）

ハンドボール
日本ハンドボール協会編
第六号
昭和三十六年五月　日印刷
昭和三十六年五月　日発行
発行所　日本ハンドボール協会
東京都千代田区神田駿河台
電話（251）九五一一〜五
振替東京五八三四八番
編集兼発行人　的場益雄
定価五十円（〒）八円